282

31

始

자 5J 24

早稻田學園

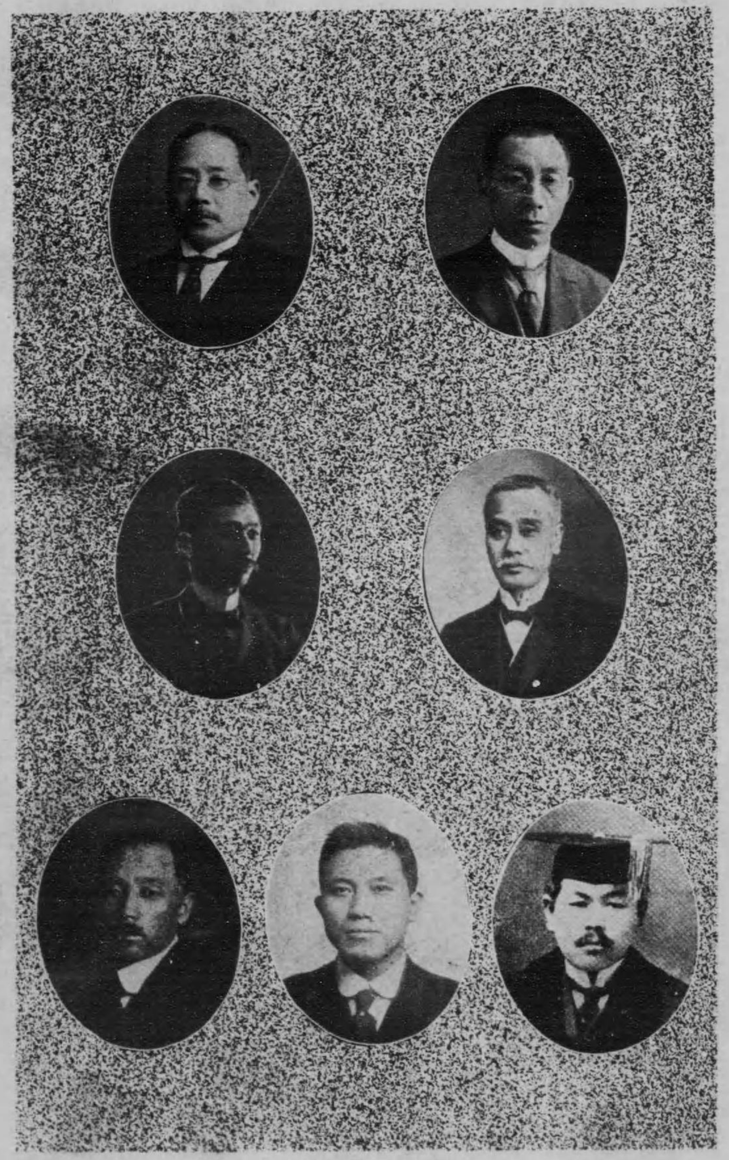
早稻田大學編

* * *

總長 法學博士 高田早苗

常務理事 法學博士 田中穂積
理事 伯爵 松平頼壽
理事 政治經濟學部長 法學博士 鹽澤昌貞
監事 文學部長 宮田修 片上伸

理事 工學博士 淺野應輔
理事 商學部長 法學博士 平沼淑郎
早稲田專門學校長 監事 坂本三郎
理事 工學部長 工學博士 山本忠興



法學部長　寺尾元彦

第二高等學院長　杉山重義

講演部長　内ヶ崎作三郎

第一高等學院長　中島半次郎

工手學校長　理學博士　德永重康

幹事　難波理一郎

圖書館長　林　癸未夫

282
31

はしがき

大學なるものは學問の場所であると同時に教育の場所である。過去に歴史なく、現在に方針なく、未來に理想なき學校は學問教育の市場であつて學園といふ文字は確と當箱らないと思ふ。わが早稲田大學には幸に過去の歴史がある。しかも相當に苦辛した歴史が又創立三十年の祝典を擧げた當時に於て故總長大隈侯爵は學校の者宿達と協議されて三ヶ條の教旨を定め之を發表せられた。これが學園現在の方針といふべきものであらう。この教旨を見れば、學問の場所として教育

大正14.4.18
内交

282-31

の場所としての早稲田大學の抱負は自ら明かであるが、其完全なる實現は、固より未來に俟たなければならぬ、又學園の學徒全部の協同的努力によりて始めて實現されるものと信ずる。

この小册子は本年始めて早稲田學園に遊學する人々をして早稲田學園を理會せしめ、其學風のある所を會得せしめんが爲めに、私の過去に於て爲せる訓示演說等を集めたものである。其內容は過去の歷史現在の方針に涉り、多少は未來の理想にも觸れたものであるから、自分ながら淺薄である、粗雜であると思ひながら、其目的に多少たりとも副ふ所があれば仕合せと考へて新入學生間に

頒布することとした。私の當初の考では、この小册子中に自分の訓示演說のみを載するに止めず、學院長、學部長其他諸君の訓示や演說などをも併せて揭げたいと思つたのであるが、新入學生の入學時期が切迫したのとそれらの速記が不整頓な爲めに、今年だけは遂に間に合はぬことになつたのを遺憾とする。要するに、この小册子頒布の微々たる計畫も故總長がわが早稲田學園は尠くとも有機的團體であらねばならぬと熱烈に希望された其遺志の達成に幾分たりとも資する所あれかしといふ微意に外ならぬことを諒とせられ、內容の不完全を深く尤むるなからんことを切望する。

大正十三年四月

高田早苗

内容

早稲田大學教旨　故大隈總長……一
早稲田昔噺　高田總長……九
故總長を追懐して早稲田學園の前途に及ぶ　高田總長……四九
創立四拾年式典に際して　高田總長……七三
總長就任の辭　高田總長……九八
皇室の恩寵と早稲田學園　高田總長……一二〇
高等學院と高等學院生　高田總長……一五八
早稲田大學教職員……一六四

早稲田大學校規……一八六
大隈會館規定……一九八
早稲田大學學生心得……二〇一

早稲田大學教旨

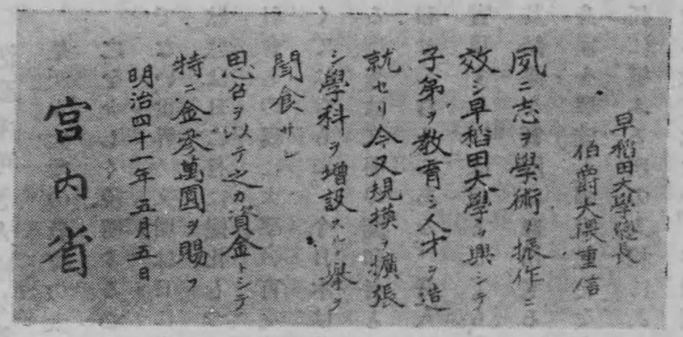
前早稲田大學總長
侯爵　故　大隈重信

閣下、諸君、今日は早稲田大學の三十年の祝典を擧るに當り、見渡す限り、此大なる式場に殆んど溢れる如く參列されたのを感謝するのである。殊に吾人の最も光榮と致すのは、歐米諸國先進なる文明諸國の百餘の大學から祝辭を送られたのを衷心より感謝するのである。殊に著名な歐米の名譽ある大學から參列者を送られたことを早稲田大學の名譽として深く感謝致すのである。私は茲に强大なる列國の全權大使全權公使諸閣下にも御案内致して置いて、其の多數は御出席の御承諾を得た、是亦學校として深く感謝致す所である。抑〻教育は、其意味に於て世界的であるのである。世界の文明は何に因て導かれたかと申すと、全く世界の學術の結果である。世界の文明は學術が

根本である。而して學術の根本は大學に在る。眞理には國境なし。眞理は大學を透して世界の上に働いて居るのである。この早稲田大學は創立以後僅かに三十年であるが、吾人は此大學より時代の要求に應ずる人才の數多輩出することを希望して居つたのである。御承知の通り明治十五年に此大學は現れたのである。專門學校として現れたのである。其時に學問の獨立を標榜して現はれたのである。而してこの三十年間に日本の文運、政治上、法律上、社會上の狀態は非常に進歩したと同時に、この學苑の敎旨そのものも次第に擴充されたのである。こゝに於て、この創立三十年祝典を機とし、吾が早稲田大學の敎育の趣旨、則ち敎旨を宣言するの必要を感じたのである。則ちこの場合に於て、數ヶ條の宣言を朗讀する。

早稲田大學敎旨

早稲田大學は學問の獨立を全うし、學問の活用を效し、模範國民を造就するを以て建學の本旨と爲す。



三萬圓御下賜御沙汰書

早稲田大學は學問の獨立を本旨とすを以て、之が自由討究を主とし、常に獨創の研鑽に力め、以て世界の學問に裨補せん事を期す。

早稲田大學は學問の活用を本旨と爲すを以て、學理を學理として研究すると共に、之を實際に應用するの道を講じ、以て時世の進運に資せん事を期す。

早稲田大學は模範國民の造就を本旨と爲すを以て、立憲帝國の忠良なる臣民として個性を尊重し、身家を發達し、國家社會を利濟し、併せて廣く世界に

活動す可き人格を養成をせん事を期す。

是が本大學の教育の大綱である。

之を少しく説明する必要を感ずるのである。世界の文明は停滯するものでない、世界の文明は日に進歩しつゝある。總て世界の思想感情、總て社會の狀態は日に月に變化しつゝある時に當つて國を立て社會を爲し、又この國と社會との爲に大學教育を施さんとするには、其根本として雄大なる理想がなくてはならぬ。今、日本は將に東西文明の接觸點に立つて居る。吾人の大なる理想は文明の調和者として東洋の文明と西洋高度の文明と並行せしめ、調和せしむるにある。吾人は此理想の實現に努めなくてはならぬ。此理想を實現するには、何としても、學問の獨立、學問の活用を主とし、獨創の研鑽に力め、其結果を實際に應用するにある。而して之に任ずべきものは個性を尊重し、身家を發達し、國家社會を利濟し、廣く世界に活動する事を以て自ら任じ、又其任に堪ふる所の人格にある。是れ卽ち模範國民である。全體大學に學ぶ者は多數ではない。多數國民の少數である。此少數の高等教育を受けたるもの

のが、國民の模範となる。國民の中堅は茲に存する。國民の勢力は茲に基するのである。それが國家を堅實に發達せしめ、總て文明的事業の急先鋒となるのである。而して模範的國民とならんとすれば、知識のみではいかぬ、道德的人格を備へなければならぬ。而して一身一家一國の爲のみならず、進んで世界に貢獻する抱負が無ければならぬ。之を支那古代の語を以て說明すれば、修身、齊家、治國、平天下である。治國平天下、世界の平和を計らんとすれば、先づ國を治めなければならぬ。立國の意味は現在の思想から云へば二つに別れる。一は國、一は社會、社會が堅實に發達しなければ國も治らない。而して其根本は家である。一國の本は一家である。家庭は則ち國を成す根本である。道義の根本も亦此家に發する。善良の風俗も此家庭から生ずる。故に教育は、人格の養成を根義とする。唯だ專門知識を吸收するのみに汲々として、此點を閑却するに於ては、人間は利己的となる。進んで國と世界との爲に盡くすといふ犧牲的精神は段々衰へて來るのである。恐るべき事である。是れ文明の弊である。此弊を避けて、其の利を收むるのは模範國民たるもの

の責任である。是れが早稲田大學の教旨の最も根本を爲すべき要點である。模範國民の、國家に對し、社會に對し、又自己に對する觀念の根本を爲すべきものはこゝにある。この理想を實現する爲めには、吾人は終身努力しなければならぬ。又只今學長から報告された如く、此の大學の今日の盛なる所以の本は全く帝室にある、皇恩にある。明治大帝の御沙汰書、且つ金幣を賜はり　今上陛下は東宮にゐられた當時、此の學校の教授及び實驗を親しく御覽になつたと云ふ有難き學事奬勵の思召が此大學を盛ならしめた本源である。是に於て私は斷言する。吾人は將に國家開闢以來の皇恩に對し、努力して報恩の誠を致さねばならぬ。此皇恩に報ずるの道は吾人の理想を實現するにある。吾人の理想とは如何。東西の文明其の物を調和し、遂に世界の平和を來すと云ふのが、吾人最後最大の理想である。此の理想を實現することに力を盡すが、國家開闢以來三千年の皇恩に報ずる所以なりと私は信ずるのである。吾人がこの大學の爲めに力を盡せば此の大學は愈ゝ盛になる。此の大學が盛になると同時に、國家も愈ゝ盛になる。國家の目的と早稲田大學の目的は必

ず一致するのである。而して教育の事は何等國際上杆格を生ずることなく、世界に大なる貢獻を爲すことが出來る。學術は世界共通のものである。眞理に國境なし、眞理は共通である。是れ世界百有餘の大學から、或は代表者を參列せしめ、又祝辭を送られた所以なりと私は信ずるのである。私は衷心喜びに堪へぬ。滿場の諸君が世界的の事業に力を盡さるゝことを實に感謝致すのである。然しながら此の大學はまだ總ての點に於て甚だ不十分である。世界文明の進んで止まない如く、大學の擴張發展も進んで止まないものである。この大學の將來愈ゝ盛になることを望む　是に於て常に社會の爲に力を盡さるゝ有力なる諸君は、今後益ゝこの大學の爲に助力さるゝことを信じて疑はぬのである。今日は天候の惡いに拘らず、斯くの如き盛會を開くを得たのは衷心喜びに堪へぬ次第である。多數御參列の諸君に、私は衷心感謝の意を表するのである。

（大正二年十月十七日早稲田大學創立三十年祝典當日の演說）

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

早稲田昔噺

早稲田大學總長
法學博士　高田早苗

一　改造と過去

今日は此學年最初の科外講演を開かれるといふことで、私に出て何か諸君に御話をするやうにと主任内ケ崎教授よりの御誘ひを受けた。如何なることを述べたら宜からうかと段々考へて見たが、むづかしい理窟は、諸君が平生正科で學びつゝあり習ひつゝあられる。尚ほ其上にむづかしい事を繰返されると云ふのも、餘り諸君の喜ばれる所でもなからう、のみならず諸君の利益とも思はれない。科外講義なるものが折節此早稲田學園に於て催されるが、其れは、學生が教場に於て得られない種類の知識を科外講演として諸君の耳

に入れたいと云ふのが蓋し學校當局者の考であるに相違ない。それならば講義外のもので何か寧ろ話をしてよからう。どう云ふ話をしたらよからうかと色々考へて見た所、諸君が知らなければならないことであつて、同時に又私が述べるに最も適當なことは、此早稲田學園の昔噺其物であると、斯樣に私は思つた。

一體早稲田學園と云ふものは恰度來年で四十年になるのであるが、其四十年の間に、兎に角此の如く發達したものであるから、其事を述べるとなれば隨分種はない譯ではない。又諸君が此學校へはひられた以上、殊に本年は高等豫科に於ても高等學院に於ても多數の新入學者が見えたやうであるが、其方方が此學園に來られたる以上、此處に學ばんと決心された以上は、此學園が如何なる發達をなしたものであるか、過去に於て如何なる歴史を有つて居るものであるかと云ふことを知らずに濟ませる譯にはどうしても行かないのである。是は諸君が義務として一應耳に入れて置かなければならぬし、又それを耳に入れて置くと、自ら此學園を愛する所の心、愛校心と云ふものを起さゞる譯には行かないこととなる。斯う考へて見ると、私がこれよりして早稲田の昔噺をするといふことは、必らずしも徒ら事ではないやうに考へられる。

併しながら、昔噺などと云ふものは、蓋し諸君には餘り歡迎されないことだらうと思ふ。此頃は社會改造の時代で、總て新しくなければいかぬ時代である。諸君も亦新らしいことを要求して居られる時であつて、昔噺といふと甚だ時代錯誤だと思はれる方もあるか知らぬ。けれども夫は決してさういふ譯のものではない。私は此頃頗る閑散であるから、時間を消す爲に頻りに繪畫を玩んで居る。繪畫を玩んで居ると言つて自分で描く譯ではないが、掛物などをひろちやくして樂んで居る。隨つて繪畫に私は趣味を持ち、又繪の話を屢ゞ聞くことがある。先年、內閣にはひつた時分に、貴族院に於て、此の繪畫教育の方針といふことについて痛く苛められたことは、今尙ほ記憶に新たである。どういふ事であるかと云ふと、其中の或議員が、一體此頃は國體上看過する事の出來ぬ畫の描き方が流行する。例へば山水を描くに、山の中に主山といつておもな山がある、之を讐へて見ると、國家に天皇おはすが如きもので

ある。此山の中に主山のない繪を描くといふことは、國體紊亂の甚しいものであるといふやうな議論をして、私を大いに困らしたことがある。其時に私は答へて……それも一應は御尤もである……御尤もであると言はないと仲々承知しないから、先づ一應は御尤もであるといつた。けれども一體繪畫といふものは古いがよいといふばかりのものでもあるまい、又新しいばかりがよいといふものでもない。何事でもさうであるが殊に繪畫の事になると、舊法を學んで新意を出すといふ事が必要である。學ぶのは古い法を學ぶ、少しも異論はない、古い法を學ぶは宜いが、古い法ばかり學んで、古人の眞似ばかりした日には少しも進歩と云ふことはない。で、宜しく此舊法を學んで、手腕を造つて、其手腕の上に新意を加へ、新味あるものを畫く、是が最も健全な方針である。私は文部大臣として繪畫の事には此方針で導く積りである……

……と斯う答へた。是は繪畫の話であるけれども、決して繪の事には限らない。何事でも皆それである。今日の事總てそれである。改造をしなければならぬと言ふ、無論惡い事を改める必要がある。新しい事は宜しい、けれども

新しい事といふのは古きが上に或物が加はつて居る事である。ジョン・チスュワート・ミルの說の如く、進歩とは保守に或物を加へたものである。過去の人間の努力が集まつて出來上つたものが現在の世の中である。之を知つて、其上に或物を加へて行けばこそ始めて進歩といふことになる。だから新しい事を欲求するのは至極尤もな事であるが、新しき事をなさんとするには先づ古き事から學んで掛らなければならぬ。舊法を學んで而して後に新意を出さなければならぬ。是れが間違ひない方針であらうと思ふ。

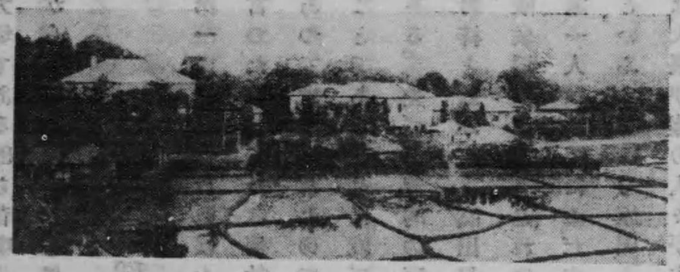
私は一つ掛物を持つて居る。何も此處で掛物の自慢をする譯ではないけれども、話の順序としていふが、掛物を一つ持つてゐる。日本で最も有名な畫家であつた雪村と云ふ人の描いたものである。雪舟雪村と云へば相並んで日本の繪師の中で最大家と申して宜い位なものである。瓜を畫いた小さな掛物である。是は近代の大家と言はれた橋本雅邦先生が珍藏されてゐたのを、私が讓受けたのであるが、此繪を或鑑定家に見せると、之は素人が描いた繪だ、こんなものは買つてはいけないと云ふ忠告を受けた。それから、或時、雅邦

先生の高弟である、有名な下村觀山といふ畫家に見せると、是は結構なものである。私が雅邦先生に就いて學ぶ時に、雅邦先生が之を始終示されて、凡て繪と云ふものは先づ斯ういふものである。此繪のよいことを君が感得すれば、必ず立派な大家になれると言はれた。是は敎を受けた最も大切なる敎科書であると答へた。兎に角面白い、夫が卽ち問題を解決する材料になる。或人が見ると、子供が描いたやうなものである、或人が見ると天下の名人が描いた最上々のものである。而も橋本雅邦の如き大家がさう認める。そこだ。子供の描いた者と名人の名畫とは殆ど似たものである。唯子供の描いたものは、舊法を學ばないで、無邪氣に筆を動かしたものである。名家の描いたものは舊法を學び學んで而してそれをすつかり忘れてしまつて子供の如き心になつて筆を落したものである。だから名人の繪は子供の繪の如く、子供の繪は又名人の繪の如くであるが、實は名人と子供とは言ふ迄もなく霄壤千里の差があると思ふ。その所をよく心得なければならぬ。新しいことは宜しい、新意を出さなければ世の進歩はないが、先づ此舊法を學ぶと云ふことが何よ

り大切である、卽ち昔噺の最も必要なる所以はこゝに存すると、勿體をつけて、是から主題に入らうと思ふ。

二　早稻田大學創立の事業

第一に述べなければならぬ事は、早稻田大學と云ふもの、昔は東京專門學校と言つたのだが、是は何故に明治十五年十月廿日に出來たのであるか、何の必要あつて世に生れたのであるか、どう云ふ理由があつて出來上つたのかと云ふことである。是に就ては事實上の原因が一つ、主義上の原因が一つ、斯う二つある。先づ事實的の原因から述べて見ようが、是が發端となるべきものは、小野梓と云ふ人と高田早苗と云ふ人と懇意になつたといふことから始まる。大隈侯爵は固より是れは別物である、兎に角此二人の一人は其時分の青年政治家、一人は大學にまだ在學して居た青二才、此の二人が交を結ぶことになつたといふことから原因した。明治十二年十三年十四年と云ふ頃の日本の天地は、大隈伊藤の人々が支配して居つた天地である。卽ち西南の戰爭に次い



早稲田大學の前身　東京專門學校

で、傷ましくも大久保内務卿は兇刃に掛つて仆れてしまつた。其跡の内閣の中軸は大隈重信、伊藤博文、山縣有朋と云ふ樣な人々である。而して他は皆薩長藩閥だが、大隈重信なるものは藩閥以外の人である。それが原因で黑田清隆、此人が横暴を極めて開拓使拂下事件と云ふ問題が玆に起つた。夫れが動機となつて大隈侯は藩閥の横暴を押へるには議會を開かなければならぬといふことを進言された。まさかさう言ふ言葉ではないが、其意味の事を唱へられた結果、寄つてたかつて大隈侯爵を内閣から追出した。維新の始から、表面は木戸、西鄕、大久保であるけれども、事實は大隈侯伊藤公の如き敏腕な青年政治家が政治を取つてゐたのだ。内閣になくてはならぬ人であるけ

れども、其爲に大隈侯は野に下ることになつた。其野に下る少し前から、矢張り政府部内の人であつて、大隈侯を輔けてゐた人才に小野梓と云ふ人があつた。此人は、土佐の宿毛と云ふ所から出た青年で、弱冠にして英國に學んで法律經濟の知識を獲得し、歸つて大隈侯に見出されて、其時分一等檢査官といつて、今の局長所であるが、それよりも大いに權威のあつた地位に置かれて、兎に角三十になるかならぬと云ふ青年で、顯要の地位を充たして居つた。此青年政治家に當年廿一ばかりの、何も分らない、東京大學の政治科の生徒の高田早苗といふ者が知遇を受けて、君達の仲間を連れて來い、さうして君達は學校で習つた事を俺に話せ、俺は又世間の話をしてやるといふので、玆に一つの會合が出來た。それは小野梓氏の橋場の別莊で出來た、其別莊は鷗の渡と云ふ所にあつて此會合を鷗渡會と名付けた。そこへ私が友人を連れて行つて始終話を聞いたりしたりしてゐた。

其の間に前に述べた大隈侯の辭職といふことが起つた。玆に世の中は一變して、其前から自由黨と云ふものが出來てゐたが、續いて秩序ある進歩とい

ふことを標榜して改進黨と云ふものを、小野梓其他の人々が大隈侯爵を助けて組織することになつた。其中に我々が大學を卒業して政府の人となる事を好まぬと云ふことになつた時に、恰度現在文科の教室、此教室の半ばだけの建物が前から出來て居た。どうして出來て居たかといふと、大隈侯爵の嗣子の大隈英麿といふ人があつて、天文學を修めて西洋から歸つて來られた。大隈侯爵と云ふ人は昔から教育に熱心な人で、佐賀に居られる時でも長崎に居られる時でも學校の世話を燒き、自ら教へられたこともある位の人で、息子が歸つて來たら一つ學校でも始めようといふので、何となく文科の建物の半ばを造つて置かれた所が、今の妙な關係から、恰度六七人の大學を卒業したばかりの人間がそこに居た。而して大隈侯小野梓先生の下に立つて仕事をしたい、働きたいと云ふものが出來た。而もそれが政治學經濟學法律學を修めた人だといふ所から、大隈侯は大いに喜ばれて、君等がさういふ考なら、あすこに建物があるから、あすこで學校をやれ、オレが助けてやる。小野さんが總て世話を燒かうといふことから、遂に此學校が出來た。斯う云ふ譯である。是が卽

ち今日の早稻田大學なるもの出來た事實的原因で、極めて簡單なものである。

三　建學の本義

そこで一の學校が出來たが學校が出來れば主義主張がなければならぬ。其主義主張は豫て大隈侯爵が抱懷されて居た所のもの、而して小野梓先生が大隈侯爵の教を奉じて、且つ自らも、是でなければならぬと平生考へて居られて所のものが、卽ち學問の獨立と云ふ文字に書かれて、此新しく出來た東京專門學校の主義主張となつた。學問の獨立といふはどういふ事であるか、是は卽ち早稻田大學の根本主義である。誤解があつてはならぬから、こゝに證據品を提出して、其最も間違ひない解釋を諸君に述べようと思ふ。こゝに二册の書物がある。一は此學校を大學にした時分の記念錄、早稻田大學開校東京專門學校創立二十年記念錄である、一は此學校に理工科が出來て綜合大學の實を擧げた所の創立三十年の記念錄である、題して創業錄と云ふ。創業といふはこの學校は何時までも創業だ、大いに前途があるからといふ所から名づ

けたことである。此二つは圖書館にあるから閑の時に御覽にはなるが宜いが、其中に今述べた學問の獨立といふ事の證據品がある。是は此學校の開校式、明治十五年の十月二十日、卽ち今から三十九年前に小野梓先生が演說をされた原稿である、先生が自分の筆で書かれたものである。此中のごく必要な部分を抄出しよう。

『大隈公嘗て梓に語つて言へるあり、曰はく、「我邦學問の獨立せざる久し、而して其未だ獨立せざるものは職として學者に與ふるに名譽と利益とを以てせざるに由る。是を以て今の時に當て我が政府は森林を擇んで之を皇家の有に歸し、皇家は其收益を散じて之を天下の學者に與へ、之をして終世學問の蘊奧を講究するの便を得せしめ、以て學問を獨立せしめざるべからず」と、公の言ふ所實に善し、天下の學者宜しく公を德とすべし』。(下略)

是が先づ學問の獨立と云ふ事の一の意義である。

『而して予を以て之を見れば、夫が外國の文書言語に依て我子弟を敎育し、之に依るにあらざれば、高尙の學科を敎授する能はざるが如きは、又是れ學者

講學の障礙を爲すものにして、學問の獨立を計る所以の道にあらざるを知るなり。夫れ人類の智力は限あり、萬象の學問は窮なし、限あるの智力を以て窮なき學問を講ず、始終これに從事するも猶ほ且つ足らざるを覺ゆ。然るを今外國の言語文書に依つて之を敎授せば之が子弟たるもの勢ひ學問の實體を講ずるの智力を分て、之を外語の修習に用ひざるを得ず。以て大に有用の時を耗ひ、中途爲めに講學の勢力を疲らし、所謂諸學の蘊奧を極むるの便利を阻碍するに至らむ。是れ豈に學問の獨立を謀る所以の道ならむや。顧ふに皇家を輔け天下の學者を優待するは內閣諸氏の責なり、唯其障礙を闢き、學者をして學問の實體を講ずるの力を寬ならしむるものに至ては、在野の人と雖も亦た其責を分たざるを得ず。而して本校の邦語を以て專門の學科を敎授し、漸く子弟講學の便を得せしめんと欲するが如き、蓋し其責を盡くすの一ならむ』。

卽ち此大隈侯の言とせられたのは少しく語つて審かならぬとがあるが、學問は學問として學ばなければならぬ、學問の目的は眞理の自由研究にある、それ

には學者が獨立しなければならぬ、學者を獨立せしめるには學者が食へるやうにならなければならぬから、天下の山林を帝室の有にする。此時分には帝室御所有の山林は極まつて居らなかつたと見える、夫を皆帝室の有にして帝室から學者に金を下さる。兎に角大膽な面白い考と思はれる。さうして學者をして後顧の憂なからしめて學問を獨立させなければならぬ、卽ち學問を學問として、眞理を眞理として、他の拘束を受けずに研究させる。是が學問の獨立と云ふことの第一義なることは論を俟たぬ。

も一つ小野梓先生が是に付加へられたのは、其は其時分の學問の事情を知らなければ分らぬ。其時分は日本語では一切專門學は出來なかつた。私共は決して日本語ではやらなかつた、一の學術上の言葉に對して日本語は出來て居らなかつた、卽ち學術語科語と云ふものは殆どない。日本語で著した著述といふものは一つもない。我々は今の中學に相當する學校に居た時代から、西洋人に就いて居た。大學に入つても西洋の書物で敎を受ける。日本の留學生が西洋から歸つて來て敎へて呉れても、其留學生は西洋の書物を以て

自分で英語を使つて敎へたと云ふ譯である。小野梓先生が、是れではとてもいけない、日本人としては日本語で學問が出來るやうでなければならぬ、今の有樣では、結局是は學問上外國の奴隷たるが如き譯であると、斯う思はれて、是を以て學問の獨立の一つの意義とされたのである。

それから茲には言つてないが、もう一つの意義がある、詰り學問の獨立には三つの意義を確に含んで居る。もう一つの意義は如何なる事かといふと、其時分はまだ世の中が今日の如く開けない、政府の權力が極めて强いから、政府が學問に干涉する、政府は都合に依つて學問に干涉する。是があつては眞理を眞理として研究することは出來ないのは勿論だ。卽ち其當時の東京大學の如きは既に政府の手が加はらんとして居る、帝國大學と名を改めては益、政府の力が加はつて、政府の權力が之を左右すると云ふ有樣であつたから、さうなつてはいけないから、獨立不羈に政府者から離れて學問を自由に研究しなければならぬ、といふことが、是は茲には言つてないが、事實に於て一番强い意義を其當時に於てなしたものと斯う見なければならぬ。卽ち早稻田大學の

根本的金科玉條として諸君が仰がなければならぬ學問の獨立、其内容、其意味は、以上三つの事が含まれて居ると云ふことを、諸君が忘れざらんことを深く希望する次第である。

四　小野梓先生

そこで小野梓先生のことを述べたから、此先生の事を極く簡單にもう少し付加へたい。既に述べた通り、小野先生は、年若うして英國に留學し、歸つて大隈侯に知られて、それで重要な位地に立つたが、幾千もなく大隈侯と共に辭職し、野に下つて立憲改進黨を組織し、暫くして肺病に罹り、四十になるかならぬ身を以て遂に此世を逝られた。其壯健な時には、此學校に一週間に一度位は來られて自から講義をされ、終には其時分最も大切な條約改正論を、此講堂に立つて血を吐きつゝ講義をしたといふが、間もなく此偉人は逝去された。極く若くて死んだ人である。併し小野先生は、私らが今に於ても頗る欽慕して居る人であつて、誠に偉い人であつたと思ふ。東京大學に於て、多數の先生に

教を受け、別段小野先生からは學問の教を受けたことはない、世間的の知識を授けられたのみであるが、併し乍ら、どの先生よりも、今尚ほ此人を忘れられないといふ程人に感化を及ぼし、人を魅する、善良な意味に於て魅する力を有つて居た人である。

小野梓先生

更に、此小野梓先生の誠に感服すべきことは、無論自ら政治家を以て任じたのであるが、先生は Politician と云ふ、今日世間に箒で掃く程ある Politician といふ者を以て決して滿足しない、之を陋とし、之を卑んで、我は Statesman なりといふ此大見識を有つて、のみならず此修養を十分にせられた人である。晝は立つて公衆に向つて演說をする、夜は筆を執つて著述をする、彼の有名なる國憲汎論を始として、短い生涯に頗る著述が多かつた。議會が開かれたら、議會壇上に立つて大に雄辯を奮ひ、國

家に貢獻しようと思つて居られた。斯う云ふ詩がある。

欲暖猶寒節序遲。朝々屈指數花期。花期未到意先到。爲賦墨江春色詩。

是れは今でも世の中に遺つて居るが、卽ち議會開設と云ふことを夢の間も忘れずに待焦がれて居られた詩である。然るにその開設を見ずして逝去された人である。卽ちステーツマンと云ふものは今日の世界、殊に日本に於て乏しい、皆ポリチシアンである。政治屋であつて政治家ではない、主義方針を立つて之を實行すると云ふ眞の意味の政治家は極めて少ない、何時も盛んなる時代には、西洋でも支那でも日本でも此政治家といふ本當の意味のステーツマンが數多現れる。さういふ人は唯政治其物に於て名を著すのみらず、學問界文學界何に於ても、亦必ず其名を著して居る。グラッドストーンは下院に立つて徹宵大演說を試みる、其暇にホマーの研究に沒頭したといふことは諸君御承知の通りである。ヂスレリーは雄辯高談四隣を驚かしたけれども、家に退いては政治小說を書いて多數の名小說が世に現はれた。佛蘭西の人傑であつたギゾーは文明史を著して居る、チエールには佛蘭西史の大著述がある。

支那の歷史を見ると司馬溫公の如き大政治家であつて、資治通鑑の如き大著述をして居る。我日本に於ても尊崇する大隈侯の如き、一方に於ては、あの通り始終政治を離れず國民を指導されると同時に、大著述が數多世に現はれて居るといふ如き、是れが卽ちステーツマンのステーツマンたる所であつて、眞の政治家は斯くあらねばならぬ。小野梓先生は卽ち其如き人であつた。此人今や亡し、實に殘念な事である。小野梓先生が健康な身體であるならば、今私が諸君に向つて演說をする如く、今日只今でも此壇上に立つて演說が出來るのに、其人今や亡し、甚だ悲しむ可きことである。

玆に『鴻爪痕』と云ふ書物がある、是は我國郵便の創始者日本のローランド・ヒル、此學校の前の校長前島男爵の事蹟を書いたものである。前島男爵が亡くなられて丁度滿一年、之を見ると、前島男爵が小野梓先生を歎はれた詩が載つて居る。前島男爵は小野先生の先輩である。先輩でありながら心を傾けて小野先生の力を認められた人である。玆に「東洋遺稿に題す」と云ふ詩がある。

題「東洋遺稿」

東洋小野梓。其名四方聞。惜哉半其業。追仙入白雲。人謂悲歌士。
激烈忘其身。安知溫與恭。接物極是仁。人謂說民利。專念斯權伸。
安知尊王志。至誠帝恩臣。精理論財政。立算闡微分。人謂壯齡儒。
飜是老吏人。容貌反其性。想像愆其眞。請作君傳者。寫眞須是勤。
浮生半夜夢。誰占百年春。嗚呼君逝矣。千載遺斯文。

是れは前島男爵が小野梓先生を歌はれた詩で、先輩の人が此の如く追慕された人であるのを見ても、小野梓先生の偉人なることは自ら分明であると言はなければならぬ。

五　創立當時の學校の規模

そこで學校は今のやうな譯で出來たが、其時分の東京專門學校の規模はどうであるか。建物としては現在の文科の教室の半分、而して生徒が八十名、教師は六名若くは八名、そこで地面は恰度思賜館の半ばまで、今大隈侯銅像前の芝生から理工科の方はずつと高い岡があつて、そこには茶が一杯に植ゑてあ

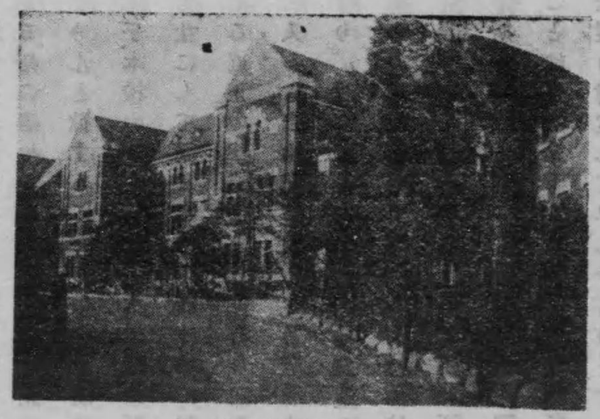
つた。此左右には田面が見え、家は一軒もなかつた。見渡す限り茫々たる稲田と茗荷畑であつた。此學校の出來た時分には今の大隈邸は侯爵の別莊であつた。其大隈邸の二階に私は寄宿をして居たが、雪が降るとそこへ雁が飛んで來て、其の雁を鐵砲で打取つては、晩食の時の肴にしたといふ位な光景であるから、此早稲田の田舍たることは推して知るべく、今日は殆ど其面影を留めない。隨つて我々始め教師諸先生の俸給の如きは先づ三人が專任で、三人が兼務で此兼任の人は辯護士をやつて居た。專任たる我々は三十圓の俸給で一週に卅時間働いた。さうして兼任の人は十五圓の俸給で、日本橋邊りからやつて來たのだが、偖其やつて來るのに一人で一挺の人力車では金が掛るからといふので、二人乘の人力車でやつて來たものである。私の如きは自分で拵へた絹の着物といふものは一枚も持たないから、母の八丈の着物を自分の着物にして着て居つた。さうして人に向つて是はホロだと言つて自慢をして居た。ホロとは母の衣と書くからである。さう云ふ有樣が當時の東京專門學校の有樣であつた。さう云ふ風で先づ二十年をボツ〳〵と經過した。

六　苦心慘憺たる二十年間の經營

二十年といへば餘り短い歳月ではないが、話を端折る爲に二十年一足飛とした。茲に二十年を經過した。其中段々學校も賑かになつて、千人近くの生徒を包擁するやうになつた。處が此間の政府の壓迫と云ふものは夫は實に酷いもので、非常な壓迫であつた。即ち政府は此學校を以て昔の西鄕隆盛が鹿兒島に設けた私學校の如く、あれは尙武的の學校、これは文治的であるけれども、物騷の差は同じ程度のものであると斯う見た。其故に出來得る限り色色苛めたのである。或る時の如きは法律科の先生を殘らず取られてしまつて一人も居なくなつた爲に、法律科が潰れんとしたから、私が據なく四方に奔走して、其當時反對黨であつたが、過般京橋で選擧を爭つた關直彦と云ふ人、あの人を始め同學の人を引張つて來て一時敎へて貰つたと云ふやうなもので、其一事を以ても政府の壓迫の强かつたことが分る。是は即ち改進黨の玉子、政黨の玉子を此の學校が養成する所であると思つて、此壓迫が加はつたのであ

る。其に就いて小野梓先生がちやんと開校の時に斷つて居られる。それは

「最後に余は一の冀望を表し、之を本校の諸君に求め、天下の人士をして本校の公明正大なるを知らしめんと欲するものなり、是れ他なし、本校をして本校の本校たらしめんと欲する事是なり、今これを再言すれば、東京專門學校をして政黨以外に在つて獨立せしめんと欲する事是なり。余は本校の評議員にして政黨員なり。今政黨員たるの位置よりして之を言へば、本校の學生をして咸く我が主義に遵はしめ、皆その麾下に屬せしめんと欲するは固より其の所なり。」然れども余が評議員たるの位置よりして之を言へば、暗々裏に我が學生を誘導して、之を我



恩賜記念館

が黨に入るゝが如き卑劣の擧動は實にこれを恥づ。惟ふに本校の目的たる、斯の學生をして速かに眞正の學力を得せしめ、早く之を實際に應用せしめんと欲するに在るのみ。故に我が學生にして眞正の學識を積むあらん乎、本校の望足れり。本校復た別に求むる所あらざるべし。而して我が學生にして異日卒業の後政黨に加入せんと欲せば、一に皆諸子が本校に得たる眞正の學識によりて自ら之を決すべし。本校は決して諸子の改進黨に入ると自由黨に入ると乃至帝政黨に入るとを問うて、其親疎を別たざるなり。惟ふに是れ余一人の冀望なるに止まらず。恩人大隈公、校長、評議員、幹事及講師諸君も亦均しく冀望せらるゝ所ならむ。然るを世の通ぜざる者間々之を疑ふなり。蓋し亦た陋と謂ふべし。』

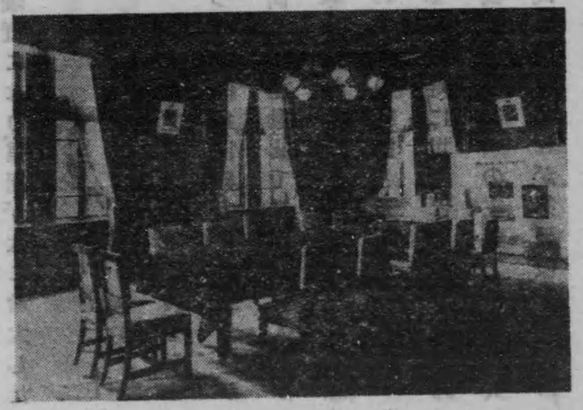
斯う明瞭に言つて居る、卽ち大隈侯始め創立者の心が公明正大な心であることは、是を見ても明瞭であるが、疑心暗鬼といふか、卑しき心の人は他の心を矢張り忖度して卑しきものとする。それで其二十年の間に非常な壓迫を受けたのは事實である。

七　大學組織と理工科の設置

併しながらそれにも拘はらず、此學校は段々發達して二十年を經過したが、財政上の苦心なども色々あつたが、さういふ事は省いて、恰度明治三十一年頃、其頃迄は私は半ば學校を教へて居たが、半ば政治に關係して居た。第一期以來衆議院議員となつて多少盡してゐたが、日清戰爭以來、世の中の形勢も段々變つて、政治の方は左程力を盡す可き機會がなくなつたのであるし、翻つて我學校を見ると、何時迄も同じやうな有樣で、生徒の數が多少殖ゑるばかりで、餘り向上し發達しない。どうも日本に於て私立大學のないといふことは文明的恥辱である、此學校を一つ私立大學にして見たいと自から揣らざる考を私が起した。そこで大隈侯にも申上げ、同僚にも謀り、自ら進んで、校長は鳩山君であつたから、學監と云ふものになつて、東京專門學校を大學にする仕事を自ら引受けて、先づ明治三十五年東京專門學校を改めて早稲田大學と稱することを天下に宣言し、東京專門學校創立廿年早稲田大學開校の祝典を擧げ、爾來五

年間諸方を奔走して、金がなければ出來ないから金を貰ひ集めた。恰度三十萬圓ばかり大方の篤志者が金を寄附せられた。是に於て始めて此私立大學、自から名乘つて私立大學と稱するものが出來上つた譯である。併しながら其内容は政治、法律、文學、後に商科が加はつたのであるが、幸にして世間の望に適つた譯か、俄に生徒が殖ゑ、千の學生が二千となり三千となり四千となり五千となり、終には其時分の中學實業の兩校を合せると一萬を以て數へ得ると云ふ位になつたのである。所で、所謂朧を得て蜀を望むは、是れ人情の然らしむる所である。綜合大學の如きものが出來上つたけれども、内容を見れば、皆大した設備の入るものではない、圖書館一つあれば、跡は扇一本で講釋して事の濟むものである。西洋あたりの大學には餘りさういふのは無い、帝國大學とても又そんなものではないから、是ではどうも幅が利かない、何としても之は實學を起し、設備の入るものを一つ置かなければ、我は私立大學なりといつて大きな顔も出來ない譯だと考へて、今迄五年の間諸方を煩して、非常に迷惑を掛けた人間が再び出掛けて金を集めると云ふも變なものであるし、頗る厚

顔な次第であるが、併し悪い事をするのではないからと決心して、恰度明治四十年、卽ち五年經つて四十年の時に其志を發表した。四十年に創立二十五年祭を行つて、此の大隈侯の銅像も其時に畫來たやうな譯で、其時に始めて第二期計畫を續けてやると云ふことを申出して、此理工科を造ることの經營に任じたのである。さうして四十一年、二年、三年、四年、五年、此間に凡そ百萬圓の金を世間の篤志なる方々から出して貰つた。其結果として早稻田大學理工科と云ふものが出來た。此理工科の出來たのはたゞ其學科だけ加はつたと云ふばかりではない、此學園に其學科が加はつたと云ふばかりではない、斯の如き費用を要する學科を私立大學が造り得たと云ふこ



恩賜館貴賓室内部

との爲めに、而も他に率先して造り得たといふことの爲めに、此學校の基礎が確實になり、信用が大に增大したといふこと、是れは確かなる事實である。

八　創立三十年祝典と大學教旨

所で創立三十年の祝典をそこで以て擧げた。其時分には大分世界的にやつて、兎に角世界の凡そ三十ばかりの重なる大學から代表者を此處へ出して、向ふの運動場で殆ど二萬人ばかりの人が集まつて、前後に無い盛んな祝典が擧げられた。こゝで先づ眞の意味の綜合大學が出來た。此時に早稲田大學の教育の趣旨と云ふものを尙一層完備することになつて、大隈總長の演說として其時に世間に發表された譯である。其はどういふ事かといふと、學問の獨立、是を第一の主義とする。次いでは學問の活用、是れが第二の主義、模範國民の造就、是れが第三の主義、此三つを以て早稲田大學の教旨と定むることになつた。即ち是は創立三十年紀念の創業錄の中に載つて居る簡單なものだから、こゝに擧げて見ると、

早稲田大學は學問の獨立を全うし、學問の活用を效し、模範國民を造就するを以て建學の本旨と爲す。

早稲田大學は學問の獨立を本旨と爲すを以て之が自由討究を主とし、常に獨創の研鑽に力め、以て世界の學問に裨補せん事を期す。

早稲田大學は學問の活用を本旨と爲すを以て、學理を學理として研究すると共に、之を實際に應用するの道を講じ、以て時勢の進運に資せん事を期す。

早稲田大學は模範國民の造就を本旨と爲すを以て、立憲帝國の忠良なる臣民として個性を尊重し、身家を發達し、國家社會を利濟し、併せて廣く世界に活動す可き人格を養成せん事を期す。

是を天下に發表することになつた譯である。世間大學多しと雖も、日本に大學多しと雖も、明瞭に此の如く其教旨を定め、之を天下に發表した所のもの幾干ありや。是は諸君の他に向つて誇りとせらる可き適當な材料であると思ふ。學校と云ふものは設備の完全も必要であるが、それよりもより大切なるは、健全なる而も進步的の教旨を備へ、其教旨に副はんが爲に努力するといふ

ことである。是は諸君が誇りとすると共に、此主旨に副はんことを夙夜努められるやう、私は諸君に希望せざるを得ないのである。

銘壁

九　學制改革と早稲田大學

恩賜館

そこで先づ綜合大學と云ふものは出來た。

而して研究機關は恩賜の金を以て恩賜館を造り之に充てたが、私は其當時早稲田大學から派遣されて歐米を漫遊し、世界の大學を見て歸つて來ると、益〻此研究機關の

必要を悟つた。恰度其頃私は內閣に入つた爲めに、學長の職を退いたが、後繼者が色々努められ、恰かも御大典に際した所から、御大典記念事業として又第三期基金を募集し、圖書館を擴張し、是に添うて尙ほ閱覽室を弘め、研究室を擴大すると云ふことになつた。幸に其の資金も出來て居るから、今後は横から見ても縱から見ても何人も指をさすことの出來ない立派な大學となるといふことを諸君は承知せられて宜しいのである。

其の中に世間は段々進歩をして來て、學制改革と云ふ問題が起つた。どうも政府者と云ふものは、兎角世間の進歩に後れるものである。現に此間まで私立公立では大學は出來ぬものと思つて居つた。又出來さぬ方針を取つて居た。大學ばかりではない、高等學校も出來ないものと思つて又出來さぬ方針を取つて居つた。ところが世中はなか〳〵そんな事では承知しない、そんな時勢ではないといふとで、議論がやかましくなり、學制改革と云ふ聲が喧しくなつた。其時私は今は亡くなられた先輩の菊地大麓先生、卽ち菊地博士と提携して、教育調査會の委員として學制改革の案を造り之が實行を計つた。

其時の委員の大多數は皆我々の說に贊成をして呉れた。其中に私は大隈內閣に入閣するとになつたが、其入閣した一の重大な意味は其學制改革を實行する使命を果さなければならぬといふ事であつたが、在職僅かに一年、其事緒に着かざる中に大隈內閣は總辭職といふとになつて、寺內內閣是れに代つた。併し一旦進步した時勢は却々容易に後戻りはしないもので、遂に曲りなりにも學制改革が出來上つた。不完全ではあるが出來上つて、豫て我々が數十年來唱へた官公私立平等と云ふとが、少くとも實行されることになつた。是は日本の敎育の上に於て特筆大書すべき一大時期であると斯樣に言はなければならぬ。事實に於ては早稲田大學なるものは綜合大學たる實を擧げて居るのに、政府者は之を認めない。社會は之を認めても政府は之を認めないが、到頭此法令の爲に政府者も又之を認めざるを得ないことになり、此に於て他の帝國大學の如き者と早稲田大學とは、事實は旣に同じやうになつて居るのであるが、今や法文上に於ても、何等其間に差別なく、其間に懸隔なく、平等の地位に立つとになつたのは學問の進步の爲に、大學の發展の爲に、諸君と共に深く喜ばなければならぬ事である。斯くなつたのは何の爲めかと云ふに、是は苟くも斯うなつた譯ではない、是には色々な原因があつて、社會の進步といふこともあらう。官僚主義の衰頽といふともあらう。官僚主義の衰頽、社會の進步、色々の原因があらうが、最も有力なる原因は、論より證據といふ事である。都の西北早稲田の一隅に於て、橫から見ても縱から見ても遜色のない私立大學が事實に於て出來た。又三田の高臺に於て、早稲田大學と相對して是亦遜色のない慶應大學が出來た。事實に於て、是が出來たと云ふ事が論より證據、輿論を動かし、頑迷なる當局を動かして、遂にこゝに此官公私立平等と云ふ事を實現した。是は決して過言でないと信ずる。是に就いては、早稲田なり、慶應なり、其關係者數十年に涉つての勞を多としなければならぬ。私の如きも先輩の驥尾に付いて此事實を擧ぐる爲に多少の力を致す事が出來たのは、衷心の欣榮とし、此上なき光榮と今尙ほ考へて居る次第である。

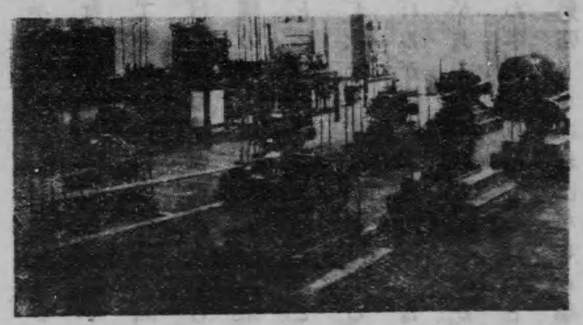
一〇 早稲田大學現在の地位と將來の使命

もう述べることは略ゝ盡きたと思ふが、今日迄の早稲田大學は以上述べた所によつて御考になつても分ると思ふが、兎に角三大時期がある。第一時期は此東京專門學校を早稲田大學としたといふ時期、是が卽ち明治三十五年卽ち創立二十年祝典の時に表はれた。次は理工科を建設するといふこと、是が大正二年卽ち三十年祝典の時に完成した。次は今言ふ通り、表面上又法令上早稲田大學が到頭他の帝國大學と少しも其間に差別がないと認められたといふ時期で、卽ち來年は創立四十年になるから、定めて當局者は其事を發表して大學自ら之を祝し、世間も亦祝せられるであらうと思ふが、卽ち是が早稲田大學の三大時期である。明治十五年の十月二十日といふ時から茲に四十年間經つて、初め八十人の學生を抱いて、文科の教室の半ばで始めたものが、今日の如き盛大なる學園になつたのは諸君と共に慶賀しなければならぬ。所で、早稲田大學は今日どう云ふ地位に居るか、卽ち今日の所では早稲田大學なる者は始めて地平線に立つたと言つて宜しい。過去四十年殆に創立當時は早稲田大學なるものは穴倉の中にあつた、穴居同樣の有樣であつた。是は確か

な事實である。世の中では之を抑へ付けようゝ〳〵とばかりして居つて、少しも之を助けるものがなかつた。全く穴倉の中に學校が出來たやうなものである。それが今日は漸く地の上に出た。地平線上に立つことが出來た。斯う云ふ譯である。併しそれでよい譯ではない。人並になつただけで夫でよい譯ならば是程樂な事はない。人並になつたからといつて、それで安心すればそれ迄だ。後は唯退歩と墮落あるのみである。これから先きが肝要である。これから先きは他の同等の有力なる大學、同等の地歩を占めて居る諸大學と競爭して一頭地を抽んずるといふことが早稲田大學の使命であるといふことは論を俟たぬ。此一頭地を抽んずると云ふことがなければ、過去四十年の努力、過去四十年の骨折は何の爲めだか分らぬ、斯う云ふことになる。卽ち諸君に努めて貰ひたい事は茲にある。早稲田大學の當局者、早稲田大學の教授諸君、總て此大學の關係者に私から求める所のものは、私から望む所のものは此點にある。競爭して勝つ、唯他と對等になつたばかりではいけぬ。自分には、斯う云ふ不足があるから、斯う云ふ不利益があるからと、愚痴を溢す時代を

經過した。過去にはそれでも宜しかつたが、今日は認められて同等の權力を備へ同等の地歩を占めたから、今更愚痴を言ふ種はない。此上他と競爭して負けるならば、それは諸君の骨折が足らないのだと、斯う言はなければならぬ。斯ういふ時期に今日はなつて居るのである。どうかして他に比して一頭地を抽んずるといふことをしなければならぬ。一頭地を抽んじたと人が認める樣にならねばならぬ。是は當局者の骨折からも生れて來る、教授講師諸君の御盡力からも生れて來るが、第一には卒業生諸君、卽ち學生諸君が此大學を卒業して後の成績、其の卒業して後の結果が良いか惡いかと云ふことによつて判然すると思ふ。だから結局責任は諸君に負うて貰はなければならぬ。諸君に高く飛んで貰はなければならぬ、高く飛躍して貰はなければならぬ。諸君が高く飛躍すればする程學校の地歩を進められる。其結果早稲田大學が他に比して一頭地を抽んずる譯になる。併し諸君が高く飛ばんとするならば高く飛ぶ準備としては深く學ぶといふことが必要である。卽ち此學園に學ばれる間深く學ぶといふ事是が最も必要なことである。併しながら深く

學ぶといふことは詰込さへすればそれで結果が宜しいといふものではない、學ぶ所のものが不消化ではいけない、消化しなければいけない、消化しなければ決して高く飛ぶ譯にはいかない。學而不思則罔といふことを知らねばならぬ。此學んだ所のものを消化させようといふならば自修的勉强、自主的研究と云ふことを忘れてはならぬ。自ら修める、自ら主として勉强をする、教師から受身になつた教を受けると云ふ腑甲斐ない根性を一掃して、自ら主となつて學ぶといふ自修といふ二字さへ忘れなければ、學んだ所のものは必ず消化する。學んだ所のものが消化すれば、必ず將來高く飛ぶことが出來る。是は決して間違ひはない。私の長い經驗の上から牡丹餅大の印を捺して諸君に保



理工科實驗室

證することが出來る。どうぞ此點を忘れないやうに、此點を忘れず、早稲田大學を愛せられるならば、今より深く學ばれ、他日高く飛ぶ準備をして、後大いに社會に名聲を博せられるやうにしたいと思ふ。けれども學問が出來たといつて、それで世の中に出て高く飛べるものではない。根本は體力だ、體が弱ければ到底駄目だ。體が弱ければ、到底社會へ雄飛するとは出來ない。私は此大學の命を受けて海外に遊び、歐米諸大學を視察して歸つて來た後に、シミジミと感じて迚も及ばないと思つたのは此體力の一事である。他の設備の如きも歐米は實に立派である。併しそれは金さへあればどんなにでも立派になれるが、體力と云ふ段になると、西洋諸國の學生と日本の學生とは著しい相違がある。此體力の相違が、やがては詰り歐米と日本と較べて、或は日本が及ばぬ事になりはしないかと我々を懸念せしめる大原因であるから、どうしても勉強しなければならぬ、學問に努めなければならぬが、同時に此體力を養ふといふことは、諸君が夢寐の間も忘れてはならぬ事であると思ふ。

以上述べることは盡きたが、最後にもう一度繰返していふ。初め言つた通り、今日は改造の時代である、今迄問題にならなかつた勞働問題とか、普通選擧とか、色々な新しい問題が起り、總て改造するといふ世の中になつた。隨つて新しいといふ氣分が世の中に漲つて居る。諸君の頭にも漲つて居る。決して是は惡い事ではない、誠に結構な事である。けれども初め述べた如く、新しいと云ふ事は、古きを積んで始めて本當の新しさを出す譯である。千年前の事でも、昨日の事でも古いといへば皆古いが、千年前から昨日迄過ぎ來つた事を知つて、其上に或る者が加はつて始めて眞の進歩と云ふ者がそこに出來るのである。さうでない新しさは、一向根據のない新しさで、何の役にも立たぬものであると私は切に思ふ。學校と云ふ所はどう云ふ所であるかといふと詰り古い事を學ぶ所である。學問といふとは古い事を知ることである。古い事を學ぶのが學問、古い事を教へる場所が學校、其處で學んだものに、諸君の頭

二　「新しい」といふ意味

で新しさを加へて、始めて着實な穩健な進歩といふものが出來るのであるから、新しさを今の青年諸君が望まれるのは進歩の種で、此上なき喜びとする所であるが、どうか輕薄なる新しさを以て滿足されざらんことを希望する。古きを溫ねて新しきを加へられんことを希望する。子供の畫くやうな繪を畫かずに雪村の畫いた瓜の如き繪を畫くやうになつて貰ひたいと切望するといふ事を、終りに臨んで今一度諸君に勸告して此嘶を終はる次第である。（大正九年四月二十八日早稲田大學中央校庭に於て）

故總長を追懷して早稲田學園の前途に及ぶ

早稲田大學總長
法學博士　高田早苗

一　學園の隆盛卽故總長の意志

今日は本大學の總長、此學園の大恩人たる故大隈侯爵を追悼し記念する爲めに此集會が開けたのである。只今鹽澤學長は、此會合の意味を說かれて、過去に向つて侯爵を追懷するのは勿論であるが、唯徒らに追懷を事とするのみが、此會合の意味ではない、侯爵の意思を繼承して、將來に向つて一致團結して、此學園を盛にする、其の誓ひを立てる、是が此會合のより重大なる意味である、といふことを述べられたのは、大に私どもと感を同じうする次第である。侯爵

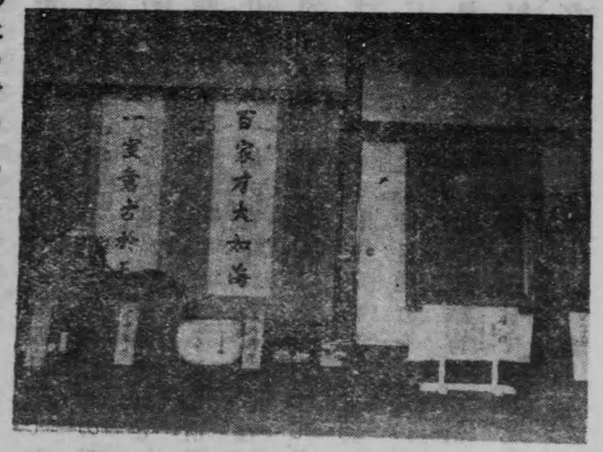
が逝かれてから既に四十餘日、此の場合に於て、侯爵を追悼し、同時に此學園の關係者たる吾々の臍を固め、未來に向つての決心を定めるのが、洵に今日の會合の趣意の最も大なるものでなければならぬと、私も深く考へる次第である。

こゝに掲げられたこのガウンは、曾て屢〻侯爵が身に纏はれて、諸君に向つて訓示をされた所のものである。今やガウンのみ殘つて其人は無いのである。所謂空蟬の空衣とは、此ガウンの事を言ふのであらう。徒らに此處に一着の衣服のみあつて、此中に包まれたあの偉大な體軀は、何れに向つて之を求めても、再び見る事が出來ないのである。侯爵が薨去せられて、我が日本の社會は確に淋しくなつた。殊に我が早稲田學園は如何にも寂寞を感ぜざるを得ない次第である。殊に私は、當時不幸にも病に罹つて、遂に大切なる御臨終の場合にも、側に侍することが出來なかつた。此の一事は、今にして尙深き遺憾を感ずる次第である。

二　故總長の印象

昔の事を思出すと、私が初めて同志の人々と共に、侯爵に御目に懸つた當時の事が思ひ浮べられるのである。今を距る滿四十年前、雉子橋の本邸、今日の佛國大使館の在る所が其當時侯爵の本邸であつたのである。庭には櫻花爛漫と咲いて居たから、多分四月頃でゞもあつたらうか、始めて侯爵に御目に懸つた。其後數日を經て特に吾々を招かれて饗應せられたのであるが、其時侯爵四十五といふ御年で、まだ〳〵血氣熾な頃であつた。侯爵夫人も卅に垂んとする位な淸楚たる淑女で御在でになつた。私はまだ廿三歲の一個の靑年たるに過ぎなかつたのである。當時は、大久保內務卿が沒せられて、數年後のことであつて、侯爵は事實に於て內閣の首班であられた。大隈參議の雷名は天下に轟いて、其の勢力は人皆舌を捲く位であつた。其人に一介の書生が御目通りをしたのが抑〻緣となつて、爾來四十年、春の雨、秋の風、侯爵の指導を受けて、敎育上、政治上、微力を致した譯である。其四十年、半世紀に近い長い歲月の間、曾て一度も侯爵の陣屋の外に出でたことはなく、今日迄に至つたのであるから、其侯爵の御臨終の場合に側に侍することを得なか

つたのである。早稲田學園の前途に就いて色々語られたから、私は之に答へた「決して前途の御心配には及びますまい、當局者其人を得て、前途に對する内容充實の方針も、略ゝ見當が立つて居るやうでありますから、それに向つて進



故侯爵臨終の居間

つたのは、實に千秋の遺恨である。併しながら、恰度侯爵が薨去になる凡そ二週間許り以前に、面會謝絶であるのを、特に願つて御目通りをした。侯爵は固より長い病氣で面瘦れて居られた。殊に私が異な感じを持つたのは、髯の無い特色の侯爵の兩頰に白い髯が生えて、殆ど始めはほかの方かと思つた位であつた。

其時侯爵は私に何を語られたかといふと、唯早稲田學園の事のみであ

みさへすれば、早稲田學園の前途は決して御心配に及ばぬと思ひまする」と申上げたら、大に喜ばれた。何でも前に理想を掲げて、之に向つて勇往邁進する事がなければ何事も成就するものでない、それは洵に結構な事であると、大いに喜ばれた譯である。其時私に向つて、殆ど冗談半分のやうに仰せられたのは「高田君、先頃は餘程私も怪しかつたのである、殊に依ると死んだかも知れないのであつたが、今日は幸にして小康を得て居るが、さて死目が近づくと、死の研究をしなければならぬもう少し病氣が良くなつたら、死の研究を始めたいと思つて居る」。斯う言はれたから、私は「それは結構な事である、死の研究程大切な事はない、死の研究程有益な有趣味な事はありませぬ、私も此頃は少しづつ研究を始めました」と申したら「さうであるか」と申された。是れが侯爵と言葉を交した最後である。

二　侯爵の三大功績—其一、新日本の建設者

侯爵が薨去せられたから、世間は侯爵に就いて種々な批評を試み、又其功績

を稱へた人も少くない、是は諸君の能く承知せらるゝ通りである。殊に侯爵の鴻業として世間の人が多く賞贊したのは、一つは早稲田大學の創立といふ事、尙一つは、早稲田に閑居せられて、世界の人に交はられた、世界的交際をされたといふ點、此二點は萬口一樣に褒めた所である。無論是は、侯爵として大功績の中に數ふべき事であるが、併しながら、私は早稲田大學を創立されたと、世界的交際をせられたといふやうなと、以上の侯爵の最大功績は其政治家としての功績であると深く信じて疑はぬのである。侯爵は常に言はれた、「政治は我が生命なり」と。如何なる場合にも、此言葉は侯爵が天下に向つて聲明せられた所である。又私も深き同感を寄せて、政治は實に侯爵の生命であつたと思ふ。世間少くとも一部の人は侯爵は政治に於て失敗して教育に於て成功したなどといふ人がある。併し、私は決して其說に服する譯に行かない。無論侯爵は教育に於て成功されたに違ひないが、同時に政治に於ても非常なる成功をされた人である。一部官僚政治家の如きは大臣の地位に上つて臺閣に立ち、而して國家を支配するといふことがなければ、政治上の成功の如く思

はないが、是れは洵に狹き見解であつて、假令朝に立たうが、野に在らうが、國家に對して大なる功勞を寄與することが出來たならば、之を稱して政治上の成功と言はずして將た何をか言はんやと私は思ふのである。侯爵の政治上の御功績は、實に多くして、一々こゝに數へ擧げることは出來ぬが、私は侯爵の生涯を通じて、其三大功績を諸君の前に擧げて見たいと思ふのである。其三大功績とは何を言ふか。第一は新日本の建設者としての功績である。第二は藩閥反對の中心として其橫暴を牽制したる功績である。第三は對獨開戰の廟議を決して國家の方針を誤らざらしめた大功績であると思ふ。此三つは、侯爵の生涯を通じての三大功績である、と私は思ふのである。

維新の業は、少數の人の骨折に依つて成つたものではないが、代表的人物を擧ぐれば何といつても所謂維新の三傑、西鄕、木戸、大久保此三大人物を擧げねばならぬ。此三大人物が維新當時の中心勢力であつて、明治政府が組織された後、其中の一人なる大久保公が、比較的に長く殘つて中心を形造つて居られたのである。併しながら更に仔細に觀ると、大久保公が中心であつたに違ひ

ないが、明治政府の初めに當つての建設事業其物に就て種々考を出し、案を立て、之れを實行された其中心となるべき人は、表面は大久保公を助ける地位に立つて居られた大隈侯爵である。少くとも大隈侯爵が其勳功の分前の大部分を有つて居らるゝ人であると、私は感ずるのである。是等の點に就てはこに居らるゝ澁澤子爵が親しく御見聞になつた事であるから、子爵の御意見も伺つて見なければならぬが、私はさう考へるのである。成程當時伊藤公爵も居られた。井上侯爵も居られた。所謂梁山泊時代、鼎の形を成して、總て政務に就いての建設事業の中心を形造つて居られたのであるが、伊藤公が眞に中心人物と成られたのは、大隈侯爵退官の後であつて、其當時は伊藤井上の兩氏といふ者は、先づ補助役である。大隈侯がシテ役であつて、此二人の人々はワキ役ツレ役であると見て差支ないと思ふ。當時外交の事は勿論、財政、產業交通其他總て今日の新日本の基礎となる所の仕事に就いては、大隈侯爵が中心となつて、鋭意計畫をされ、實行されて茲に新日本の端緒が少くとも開かれた、其勳功は實に大なるものであると私は思ふ。

其二　政治家としての消極的功勞

第二は前に申した藩閥反對の中心として、其横暴を牽制した勳功、世間の人は政治家の積極的功勞を認むるけれども、消極的功勞を認むる人が少い。斯くの如く、國民が偏見であつて物の觀方を知らなければ、眞の立憲政治の出來上る筈のものでないのである。諸君の能く承知せらるゝ通り、英吉利に於ては、政府を陛下の政府と唱へる。と同時に、反對黨を陛下の反對黨と唱へる。ヒズ・マジェスティーズ・ガバメント、ヒズ・マジェスティーズ・オッポヂシヨン、是れが卽ち眞の立憲國民の物の觀方であると言はなければならぬ。政治を爲すのも、陛下の御爲め、政府の爲す政治に反對し、批評するのも陛下の御爲め、卽ち陛下の政府であると同時に、陛下の反對黨である。斯く觀て始めて立憲政治が圓滑に行はれて行く、此反對の務めといふものを國民は始終觀なければならぬ。其反對の役目、中心勢力は何人にあつたかといへば、大隈侯爵であつたのは誰も認めなければならぬ所の事實である。成程政黨を造り、國會の開設其他の事

に就いては、寧ろ板垣伯爵が大隈侯爵の先輩と觀て宜しい。又板垣伯爵が維新の元勳の一人、又最も敬愛すべき人格者であつたに相違ないが、併しながら過去長き間の藩閥反對の中心は板垣伯に非ずして大隈侯である。板垣伯及び板垣伯の率ゐた黨派卽ち自由黨は、成程政府に反對したことも屢〻あつた。又妥協したことも屢〻あつた。第一議會の終り、第二山縣內閣の當時其他妥協の行はれたことは屢〻で、其系統が今日の所謂政友會であることは諸君の能く御承知のことである。其玆に至る所の因緣蓋し淺からずといつて宜しい。之に反して大隈侯爵の率ゐられた立憲改進黨、又進步黨は、政府反對の中心であつた。絕えず政府反對であつたが、其黨派がどうであらうと斯うであらうと、大隈侯爵一個人が、此早稻田に閑居して居られたる老偉人一人が、反對勢力の中心、藩閥勢力の牽制者であつて、何人も之を何如ともすることが出來なかつたことは、過去に於ての顯著なる事實である。此功績、政府反對藩閥反對、藩閥橫暴の牽制的動功、是れはどうしても大隈侯爵に對して國民は認めなければならぬと思ふ。

其三　對獨開戰の國是決定

第三は對獨開戰といふ國是を決した事である。大隈內閣の當時、恰度私は外國に居つて、こゝに居られる增田君と共に海外に漫遊して居て、開戰となつて、瑞西のゼネヴァに歸る事も行く事も出來ずして困難を極めて居つたが、其當時增田君と語り合つて、日本政府はどうするであらうかと頻にそれを心配して居つたが、ゼネヴァに居る間に、遂にアライス卽ち聯合軍と共に獨逸を討つと云ふことになつたと聞いて大いに安心した。當時日本の輿論は、矢張腹の中では獨逸の武力を恐れて居たに違ひない、一面又陸軍の軍閥は、何れも獨逸の教育を受けて居るものであるから、此戰は獨逸勝ち、英佛負けると、初めから高を括つて居つたのである。而して日本の知識階級、學者社會は多く獨逸で教育を受けた、獨逸風の學問をしたのであるから、深き同情を獨逸に對して有つて居たのである。此場合に處して、平凡の政治家は必ず局外中立と極めるのが關の山であるのに、一步進んで旗幟を鮮明にして、聯合軍と共に獨逸を討つ

といふ對獨戰爭の、此國是を定めたといふことは、大隈侯の如き大度量の人、非凡の政治家が廟堂に立つ時に於て、始めて實際に行ふことが出來た譯である。其戰爭以後の日本の繁榮、故原首相の所謂五大國の一と認めらるゝに至つた事、今日又少し肩幅が狹くなつたやうで、大分世界の猜疑嫉妬の爲に苦められて居るやうであるが、兎に角嫉妬猜疑される迄に日本の國力の伸びたのは、大隈侯爵の此決斷の賜と言はなければならぬ。

四　大隈侯と國民葬

斯くの如く政治家として重大の勳功ある人であるから、其の一旦病重り、危篤に瀕せらるゝや、上、御一人が宸襟を惱まし給ひ、下、國民其の薨去を聞いて哀悼の念に打たれ、殆ど慟哭せんばかりの狀況を呈したのである。又是れだけ大勳功の有る人の終りであるから、國民の熱情が溢れて、彼の前代未聞の國民葬といふ盛況を呈したのも決して不思議はない譯であると思ふ。私は此場合に於て、國民葬と國葬の得失を論じ、何れが淋しいかなどといふことは述

べない。併しながら、是だけの事は確に言ひ得る、卽ち一體國葬なるものは、國民葬の如き性質を帶びなければならぬ、國民が死者を痛み、死者を惜む熱情が現はれるのでなければ、眞の國葬とは言へない、將來の國葬は國民葬的國葬であつては欲しい、官僚的國葬であつては欲しからぬといふことだけは言ひ得ると思ふ。其國民葬といふ一つの特色ある葬儀は、葬儀委員たる市島君、增田君其他の人々の段々考へられた結果であらうと、私は深く今でも感謝の意を有つて居るが、是はどういふ事から思ひつかれたか知らないが、確にヒントを得られたのは、彼の英國の老偉人ウィリヤム・エワート・グラッドストーン翁のウェストミンスター・ホールに於ける所の國葬、五十萬の人が會葬したといふ、あの國葬是にヒントを得られたも

故大隈侯爵の墓

のであらうと思ふ。グ翁の國葬たるや、私の所謂國民的國葬である。未來の日本國葬は此グ翁のウェストミンスター・ホールに於ける國葬の如くならんことを希望する。グ翁といふ話が出ると、私はグ翁と大隈侯の比較といふことに思ひを馳せざるを得ない。大隈侯が薨去されると色々な批評が出て、又西洋の大政治家と比較する評論も大分新聞雜誌の上に見え、多くの人は、此グラッドストーンと大隈侯といふ比較を爲された樣に思はれる。內ケ崎教授の如きはゼファーソンと比較されたのを雜誌の上で見た。それは人々の考で、色々の比較があつて差支ない。成程グ翁は大隈侯と似た所が多い。國民の大多數に熱愛された點、グランド・オールド・マン、彼れは英國の老偉人是れは日本の老偉人、此グランド・オールド・マンと國民に呼ばれた點、又政治家にして著述家、著述家にして政治家であつたといふ點、又高遠なる理想を抱いて、之を實現しようと試みたといふ點、是等の所を比較すれば、確にグラッドストーンと大隈侯は類似の點があるに相違ないが、私は其兩者の性格は大分異つた所があると常に思つて居るのである。

五　大隈侯とパーマーストーン

私は、大隈侯はグラッドストーン其人よりも寧ろロード・パーマーストーンに似て居ると考へて居る。愛蘭の貧弱な一貴族より身を起して、恰度侯が佐賀の一士族より身を起したと同じ樣な譯で、遂に英吉利の名外務大臣と言はれ、自由黨內閣の名宰相と呼ばれた此パーマーストーンに似て居る所が仲々多いやうに思ふ。どういふ所が似てゐるかといふと、第一に愛嬌のある所が能く似て居る、第二には磊々落々として小節に關はらぬといふ所が似て居る。グラッドストーンは正直一方の人で、非常に嚴格な人であるが、パーマーストーンに至つては、愛嬌のある老人、磊落不羈な人であつた。此點は餘程大隈侯に似て居る。あの雄辯宏辭四隣を驚す談論、是も兩者誠に能く似て居る。又殆んど傍若無人と思はれる程の日覺しい對外的外交をやつたといふ點も大隈侯とパーマーストーンとは、餘程能く似て居る點があるやうに私は思ふのである。又八旬に越えた所の老翁でありながら、內閣の首班として政務に鞅掌

せられ、髮喋として毫も元氣が衰へなかつたと云ふ點も侯爵に能く似て居る。唯バーマーストーンは大隈侯に及ばざる所が多い、侯は大なるバーマーストーンであつて、バーマーストーンは稍小なる大隈侯であつたと私は思ふ。又尙ほ似て居る所、似て居ると云ふよりも一寸運命の惡戯とでもいふべき所に斯ういふ事がある。御承知の通り、バーマーストーンは、佛蘭西の大統領であつたナポレオン三世を助けた。或意味でいふと、一種の山師とも稱す可きナポレオン三世は、此バーマーストーンの力に依つて、遂に帝位に卽いたのである。是れについては、英女皇ビクトリア陛下は非常に御不服であつたけれども、バーマーストーンはどういふ考か、此ルイ・ナポレオンの佛蘭西の天子たることを認めた。大隈侯爵は其反對で、支那に於て、これも亦多少山師的の彼の袁世凱が天子にならうとした時、大隈侯は時恰も內閣の首班にあつて、遂に之を抑へて天子たらしめず、それが爲めでもなからうが、袁世凱は遂にあの世の人となつたのは諸君の御承知の通りである。是は似て似ざる點であるが、兩者を比較すると、一種の興味を感ぜざるを得ない。

バーマーストーンは雄辯宏辭の人、大隈侯も亦雄辯宏辭の人であつた。バーマーストーン一代の大演說に、ドン・パシフヒコ問題の演說といふのがある。其演說は隨分長い演說で、今日の夕方から明日の明方まで、一人で饒舌り續けたと云ふ長い演說である。英吉利の議會は午後の四時といふに開いて、明日の朝まで議論があれば續けると云ふ卽ち夜の會である。今日の點燈頃より翌日のしら〳〵明けまで續いたと云ふ有名なる大演說である。ドン・パシフヒコといふたしかモロッコあたりに生れた猶太人で、ジブラルタルで育つた時に英吉利に轉籍して、英吉利の國籍に入つて居る。それがアテネへ行つて商賣をして居る時、アテネで一揆の爲に襲はれたさうして非常に損害を受けたといふので、其損害を希臘政府に拂はせようとしたが中々拂はぬ。バーマーストーンはそればかりではない、種々前後の關係もあつたのであるが、大いに憤つて軍艦を差向けて、遂に希臘政府を壓迫して償金を拂はしめた。是れが爲めに利害關係のある佛蘭西は大いに怒つた。又是れが爲めに利害關係ある露西亞も大いに憤つて、將に國交上の危殆を來した。餘りに遣り方が弱い者

苛めだ、其位の事に軍艦を派遣すると云ふことは不都合千萬だと云ふのが英吉利の國内に於ける反對黨の攻擊だ。其時にバーマーストーンは一場の演說に依つて、遂に其反對黨の攻擊を仰へ付けた。卽ち今日の夕方から明日の朝までの演說をやつたのであるが、其最後の言葉はどういふのであるか、それをここに擧げて見る。

Whether, as the Roman in days of old held himself free from indignity when he could say, 'Civis Romanus Sum,' So also a British subject in whatever land he may be, shall feel confident that the watchful eye and the strong arm of England will protect him against injustice and wrong.

「昔し羅馬人は、『我は羅馬市民なり』、斯う言ふと何處の人間も皆恐れをなして無禮を加へなかつたのであるが、今日苟くも英吉利の臣民は、世界何れの端に居ようとも、必ず英國の注意深き眼、英國の强き腕が彼を保護するといふことに付いて安心させなければならぬ」と最後に獅子吼したのである。此獅子吼の爲に反對黨も此内閣に一指も加へることが出來なかつた。これバー

マーストーン三寸不爛の舌の大功名である。大隈侯爵が、外務大臣の時に、私は其時候に從つて外務省に居たが、布哇に於ける日本移民の問題で軍艦を送つたことがある。反對黨は大分嘲笑を加へたのであるが、大隈侯の心はバ卿と同じことであつたに相違ない。Civis Romanus Sum（吾人は羅馬市民なり）この考を抱かれたればこそ、日本の移民を保護する爲に軍艦を派遣することになつた。不幸にして日本の議會は進歩して居らぬ、日本の議會の議員の多數は、名演說を聽く耳を持つ人が尠ない樣に思ふ。それが爲に大演說と云ふものが、上院下院に於て餘り多く聽かれたことがない。大隈侯の雄辯を以て、若し聽く人があつたならば、今日の點燈頃から明日の拂曉まで衆議院の議場に於て、雄辯を振はれてシビス・ローマヌス・スムを叫ばれたに相違ないが、惜しいかな、侯爵に此機會を與へなかつたのは、抑〻是れ誰の罪ぞやと、諸君と共に不足を言ひたいと思ふのである。要するに隈侯とバ卿とは類似の點が多い、併しながらバーマーストーンは、所謂高遠の理想が無い、又バ卿は曾て一度内務大臣たりし時に、「予は學ぶ爲めに來れり」といひしが如く、外交以外政務には餘り

通じない人であつた。その點に至ると、外交のみならず、財政、教育、産業、交通、如何なる政務にも通曉された大隈侯には遙に及ばぬのである、是れ私が、大隈侯はパーマーストーンの大なるもの、パーマーストーンは大隈侯の小なるものといふ所以である。

六　至誠の人至孝の人

私の話は段々脱線をして來たが、併しながら今一言大隈侯のことについて諸君に申上げたいのである。如何にも侯爵は親孝行の方であつた。是れは諸君が能く記憶されたいと希望する。侯爵が教育上に功勞あり、政治上の功勞があるとしても、此親孝行といふ事實がなければ、侯爵の價は半ば下落するのである。然るに侯爵程の親孝行の方は餘り世間に見當らぬと言つて宜しい。恰度九十に近き齢でなくなられた御母堂生前に對して孝養を盡されたことは、苟も大隈家の門を潛つた者は何人もよく知つて居る。又大隈侯爵に似合はしからず、あの邸の一隅に社がある、餘り大きくはないが、社がある。何

の爲めに此社があるかといふと、侯爵の御母堂が生前に於て敬神家であつた、其爲めに建てられた社である。其社が今でも依然として存して、侯爵は常にそこに參詣される。又侯爵は御病中に――此間親近の人から聞いたが、此病中の爲めに久しく音羽に參詣しない、久しく御無沙汰をして居ると常に此事ばかり氣にされた。音羽とは何ぞや、卽ち御母堂の墓のある所である。侯爵の親孝行は誰もよく知つて居ることである。此に於て始めて至誠の人を見る。侯爵は大政治家でもあつたらう、大教育家でもあつたらうが、夫れよりもまして殊に至誠の人であつた、至孝の人であつたといふことは、如何にも侯爵に對して我々の欽慕の情を深くする次第である。此點は豐臣秀吉に能く似て居られる。豐臣秀吉は、日本が始まつた以來の大豪傑大英雄であるが、其母に對する孝心の深かつたこと、孝行の念の厚かつた事は歴史上明かである。或は多少私の記憶が違つて居るか知れぬが、たしか朝鮮征伐の眞最中であつたかと思ふ、九州の名護屋迄行かれて、遙に三軍を指揮されて居た時、大政所の病篤しといふことを聞かれて、あわてふためいて歸られ、看護に手を盡された。

而して其大政所がなくなられた時には、子供の如く慟哭されたといふ、是れは秀吉の一生の歴史の中の最も美しい點であると私は思ふが、其の點に於ては、大隈侯爵は、豐臣秀吉に誠によく似て居られる、實によく似て居られると、私は常に思つて居る。

七　侯爵亡き後の吾人の覺悟

此大偉人、而も至誠の人、今や卽ち亡し、空しく此ガウンのみ遺つて居ると云ふ譯である。此ガウンは大正二年に三十年祝典を、私が學長として擧げる時にあたつて、始めて此式服と云ふものを制定したのである。其時は御承知の通り、世界の大學皆祝詞を贈つて、我大學の三十年に達したことを賀せられたのである。あすこの大運動場に殆んど三萬と云ふ大衆が集まつて、此學校の前途を祝された、その時に、式服の制を定めたのである。此の深紅の服を總長の式服と定めて、之を獻じた所が、總長は之を纏はれて、子供の如く喜ばれて、「オレは大僧正になつた」と言はれたのであるが、其喜ばれた人今や卽ち亡しといふ次第である。然しながら先刻鹽澤學長の言はれた如くに、大隈總長は此ガウンを着て諸君の前に立つて、常に何を言はれた。女々しく過去を悲しめよと言はれたか、大隈侯爵は常にさういふことを諸君に教へられた筈はないのである。大隈侯爵は絶えず前途を眺められたのである、先刻病床に於ての御話のあつた時に申した如く、前途に理想を置いて、是に向つて勇往邁進せよといふのが、總長が此ガウンを着て諸君に常に教へられたことである。我々早稲田大學の學徒、此總長の致を奉じて、過去として葬り去り、未來に向つて此學園の發達、此學園の發展を計つて、總長の志を空くせざらぬやうに致し、總長の遺志を繼承するを以て最大責務としなければならぬ。此處に集まられたと集まられざるとを問はず、早稲田大學の教職員校友及び學生諸君は、今後一致團結協力して此總長の心を以て心とし、此學園の繁榮發達を計られんことを、深く私は希望する次第である。

過般來段々聞く所によると、此大學の學長始め幹部の方々は、其の邊に就いて大いに考へる所があられる。內容充實、精神上、學問上、教育上の內容充實、設

備上の內容充實是等に就いて段々調査を遂げられつゝある。此調査の結果は來るべき四十年祝典、此秋に於て催さるべき四十年祝典に發表せられ、其後十年を期して五十年祝典の時までに之を實現するといふ。斯ういふ計畫が今頻りに企てられつゝあるから、諸君が其を耳にする日は蓋し遠くなからうと思ふ。大發展をする、大繁榮を計るとした所で、其の目的を定め、計畫を立てて、それに向つて勇往邁進しなければならぬのであるが、幸にして其成案は今や成らんとして居るといふことである。此計畫を成就する、十年を費して一の事業を經營することは、必ずしも難事でない。私ども早稲田學園の經營に任じた日に於て、自から爲した所に徵して見ても、其實に徵して見ても、決して難事でないのである。兎に角諸君は今後志を一にして、此會合をして有效なる最も意義ある會合たらしめ、侯爵を記念して、前途に向つて發展を計る門出たらしめると云ふ心を以て、此學園の繁榮に協心戮力されんことを深く期待し、而して此追悼の演說を終らうと、斯樣に考ふる次第である。（大正十一年二月十九日早稲田大學校庭に於ける大隈侯爵追悼會當日の演說）

創立四拾年式典に際して

早稲田大學總長
法學博士　高田早苗

一　四十年前の早稲田

早稲田大學の創立四十年の式典を本日催すと云ふことになりまして、而かも未だ故總長の薨去後一ケ年を經過せざる今日であると云ふ意味、記念事業を起して廣く大方を煩はして居ると云ふ理由、此二つの爲に極めて質素な而かも祝典にあらずして式典に止めて置くと云ふ其事は先刻學長から段々御話がありましたから再び玆に繰返さずとも諸君は能く御了解下さることと思ひます。又學長は先刻來殆んど一時間に亙つて段々懇切な御話がありました。私の後には此早稲田大學の爲に非常に力を御添へ下さる所の澁澤子爵が其八十有餘年の充實したる生涯より得來つた經驗、知識、其一端を洩されて

諸君に訓示せられる所があらうと思ひますから、實は私が此間に立つて何も申上げる必要はないやうな考もするのであります。併ながら私がするのに最も自ら適當なりと思ふ一の役目がある。それは何であるかと云ふと學校の昔話をすると云ふこと、甚だ役にも立たぬ譯でありますけれども、抑も此學校が明治十五年の十月の今日に開かれた其初日よりして滿四十年、今日に至る迄此學校に關係をして居たに相違ないのでありますから、外の事は偖措いて、學校の昔話ならば私が一番適任者であらうかと斯う思ふ、故に少しばかりその御話を申さうかと思ひますが、併ながら是も過去に於て一二回試みたことがない譯ではない。早稲田の今昔と題する私の演說の中には創立當時の狀況から學校の昔のことに付いて大かた御話をしてありますから、今日は重複を努めて避けて稍や諸君に耳新しからうと思ふことを、成る可く手短かに御話して見よう。

度々繰返される如くに、此學校が四十年の昔にあの向うに見える文科の教室、而かも其半分からして始まつた。之は屢〻繰返されて諸君の能く御承知

のことである。今日から見ると妙な所へあの建物が建てられたものであると諸君は思はれるだらうと思ふ。之はどう云ふ譯だと云ふと現在此私の立つて居る場所の如きは可成り高い丘であつて、一面に茶畑であつた、卽ち學校の敷地と云ふものは諸君の居られる所よりももう少し後へ下つた所の極く一小部分の平地に過ぎなかつたのであるから、最初の建物があの邊に出來るのも蓋し自然のことである。私は學校の出來ました當分は大隈侯爵御夫婦の思召で、其御別莊の二階に友人の田原榮君と二人で食客をして居りました。あの御別莊と云ふのは此處に居られる評議員會長兼理事であられる所の校友松平賴壽伯の御先代からの御別莊である。それが後に至つて大隈家の御別莊となつたのでありますが、其二階に居る時分に雪などが降りますと裏の田甫に鴨が來たり雁が下りる。此學校の始めての幹事秀島と云ふ人がありましたが、鐵砲の鍛錬な人で以て、さう云ふ場合には出掛けて行つて獵銃で雁などを一發打放して之を捕へて歸つて我々に御馳走をして呉れたと云ふやうなことが屢々あつた。固より此四面に家屋などは一軒もない、田にあらざれば

茗荷畑あるのみであつて、食物店は蕎麥屋が一軒あつただけと云ふのが此學校の出來た當時の此土地の有樣であつた。

二　大隈家の補助と東京專門學校

夫れだけのことで凡ての當時の狀態は諸君が御偲び下さることが出來ようと思ひまするが、そこで此學校は大隈家の創立せられたものであると同時に大隈家の補助に依つて維持されて居つた。確かに記憶して居りませぬが、其當時年々二千圓宛大隈家から補助されて居りました。今の二千圓は何でもありませぬが其時分の二千圓は學校一年の收入に殆んど匹敵する位なものである。學生の月謝が一人一圓で、始めは生徒は八十人であつたが、少し繁昌してからでも先づ二百か三百でありますから高の知れたものである、それに對すると二千圓の補助は誠に少くない譯である。其時分は我々も仲々少ない所の月給で働いたものである、私が早稲田大學の教師の最高給者であつたが、其人の俸給が一ヶ月三十圓であつて、而して受持時間が一週三十時間から

三十五時間を上下した譯である。さうして其吾輩は家族が九人あつた、併し妻君はまだ無いから子もない。廿三の青年でありますから固よりまだ妻はない、妻がなければ子もないが、父があり、祖母があり、事業で失敗した兄なる者が澤山の子を率ゐて家へ來て居る。其次の兄が是は工業の技師であつたが誤つて機械の爲めに身體を卷かれて死んでしまつた。其寡婦が子供を連れて私の所に來て居ると云ふやうな譯だから九人位な頭數は直ぐ揃つてしまふ譯である。此九人の者を物價も安いからであつたが、三十圓の月給で食はせ、自分も食つて居たのであつた。而かもそれが最高級者と云ふのであるから當時の狀態は推して知るべしである。

三　經濟上の獨立と大學組織

左右して居りまする内に段々妙なことを考へて、我々此學校に關係する以上は、之は一生涯の仕事だ、又學校と云ふものは永遠のものだ、さうすると大隈家の補助を永遠に受けて居ると云ふことは宜い事であるが如く又意氣地の

ないことである。侯爵と雖も年々少なからざる金員を是に投ぜられることは仲々御苦しいことであらう、又我々も夫れに依賴して居ると云ふやうなことであつては何時迄も人を賴りにすると云ふことであつて、其結果甚だ面白くないから、寧ろ大隈侯爵に申上げて其補助を御斷はりしようではないか、之は私が甚だ突飛な譯であるが言出したことで、そこに居られる市島君、亡くなつた田原君、今日此所へ來て居られませぬが坪内君と云ふやうな人々と相談をしまして、さうすれば御互が食へなくなる譯だがと云ふこともあつたが、段々計算して見ると一圓の月謝を一圓八十錢に上げれば、どうか斯うか收支相償うといふことになつた。所が一圓を辛うじて出す學生に一時に八十錢の增徵をすると云ふことは之は仲々容易なことではないが、私が言出したことだから、拠所なく其學生を說く役目を引受けて、あの建物の左の窓のある其時分はそれが大講堂でありましたが、あの教室に於て學生を集めて一圓を一圓八十錢に上げる論と云ふものを試みたのであつた。所が學生は大いにそれに共鳴して呉れまして一人の異議者もなく八十錢を增徵することになつた。それ

で尙ほ我々が定まつただけの俸給が貰へない場合には少し人の惡いやうであるが外の學校へ稼ぎに行く、私の如きは中村敬宇先生が始められた同人社、近所で時間が掛らぬから其處へ行つて稼いでは此所へ來て教へると云ふことであつた。左右して居る内にどうか斯うか此學校の經濟の基礎が立つて、先づ經濟上の獨立と云ふのも烏滸ケ間敷いが、先づ獨立の如き有樣に立至つた、其時に十年の式典と云ふものが擧けられたやうに思ひます、時は明治二十五年、次の祝典は十五年の祝典で、之が明治三十年に擧げられたと記憶します。此卅年に於ける祝典の時に、其當時の伯爵卽ち大隈侯爵が是に臨まれて演說をされた、其一節を玆に讀んで見ますると、斯う云ふことを言つて居られる。

私の將來の希望は少し大膽な企てのやうではあるが、どうも此學問の獨立を期したいと云ふことである。之が聊かでも其效が現れたならば國家に對して我々の甚だ喜ぶ所である。それからどうも之が一歩進んで大學とまでならずとも大學に近い或は大學となるか知らぬが學科を段々ふやして行くと云ふことの出來るやうになつたならば、私の十分滿足する所、又社會に

對しても非常な面目、又學校の名譽或は學生諸君に於ても甚だ榮譽とする所である。

斯う云ふことを大隈侯爵が突然此處で演說をされたのを私が小耳に挾んで、成程侯爵の言はれる通り、何時迄も東京專門學校でもあるまい、何とか一つ考へて見よう、私立大學といふものも無論必要なものであるから、何とか一つ考へよう、其當時私は衆議院議員でありまして政治と敎育と兩方面に亙つて居つた、尤も學校の事は其時分は有給の校長などと云ふものは無論得られませぬから、皆名譽校長であつた。大體名譽校長のことだから大きい事は無論心配もされるが、平生の事は餘り世話は燒かれぬ、幹事一人で學校を支配して居つたのであるが幹事一人では隨分手に餘ることがありますから、私が自から薦めて專務委員とも云ふやうな譯で、始終幹事の相談相手になつて居たのである。けれども一面政治に關係して居りますから、さう毎日學校へも來られなかつたのであるが、大隈侯の望みを達するには自分が第一政治を止めて、學校の事を見なければならぬと斯う考へて、幸ひ總選擧の期に達した時に斷然代

議士の職を辭し、候補者たることを止めて、さうして當時の大隈伯爵の理解を得まして此大學組織の事に自から當るといふことに極めたのであります。それが丁度明治卅三年と記憶します。それからして夫迄はさう申しては可笑しいが鏹一文たりとも大隈家の外は此學校は人樣の迷惑にならなかつた。御世話になつたことはないのでありましたが、大學にするのには無手では出來ぬから始めて玆に基金募集と云ふことを考へて、三十萬圓あればどうか斯うか出來ると云ふ計算が立ちました、其基金募集と云ふことに第一に着手した。さうして明治三十五年、それ迄に豫定の三十萬圓が集まつた譯ではありませぬけれども幸に大方の贊同を得て段々見込が立つて來ましたから、三十五年、それが東京專門學校の創立廿年でありますから、東京專門學校創立二十年早稻田大學開校といふ此記念祝典を此時に擧げたのであります。此時よりして、東京專門學校の名を改めて早稻田大學卽ち今日の如き名稱を以て世間に臨むといふことになつたのであります。其祝典の特色とするのは故伊藤公爵が此の祝典に臨まれて一場の演說を試みられたと云ふことであります、

もう一つの特色は初めて日本に於て提灯行列と云ふ事を考へ出して、總體の生徒を指揮して宮城前に至つて、天皇陛下萬歳を唱へて、提灯を打振つたといふ事此二つが二十年の祝典の特色といば特色である。

四　二十年祝典に於ける故伊藤公の演說

提灯行列の事は暫く措いて、伊藤公爵が此場所に臨んで、其祝典に臨んで演說をされたことは、大に意味の有る事である。諸君も屢々御聞きになりましたらうが、此學校は政黨の學校である、大隈の野心の機關であると長く世間に思はれて居て吾々が苦痛を感じた。屢ゝ其然らざる所以を侯爵自身も小野梓先生も創立の其當時でも言明されたのだが、世間の疑惑は更に解けなくて、大に此學校の發展を害して居た。所が其政黨學校と看做されるものが基金の募集をするといふのであるから、さう見られては世間が狹くなるから、何とか是はしなければならぬと私は思つた。無論日本半分は大隈伯爵の勢力に依つて、其後援に依つて、金が集められるが、後の半分は誰に頼んだら宜からうと、

斯う考へて、是は伊藤公爵に御頼みをするより外はないと思ひましたから、前に一二度御目に懸つたことはありますけれども、政治上の關係而も反對黨の一議員として御目に懸つただけであるから、少々闊の高い譯であるが、それに拘らず、出かけて行つて、段々話をしました所が、あれだけの偉い方でありましたから、忽ちにして理解されて、如何にも結構な事である、大學は官立ばかりではいけないので、どうしても私立大學が起つて之と競爭するといふことでなければならぬ。私は大隈とは昔は親友であつた、後、意見を異にした爲に政治上今尙敵身方の如き地位に立つて居る

早大圖書館の設計

が、夫と是れとは違ふ譯である。大隈が大學を建てんとするといふことは、此上もなく私の、贊成する所であるから、第一、貧乏で餘計な金は出せぬが、少し寄附しようではないか、さうして開校式でもやるならば、行つて宣ければ、出掛けて行つて演說をしようと、斯う言はれたものでありますから、私も大に欣んで、早速寄附を貰つて、歸つて大隈侯爵に其事を申すと侯爵も大に欣ばれた。其約束を違へず、廿年祝典の時に此處に來て演說をされた。可なり長い演說ですから、皆な讀みませぬ、ホンの一節を申して見れば斯う云ふ事を言はれて居る。

次に一言すべきは此東京專門學校を以て黨勢擴張の具と爲さんとするものゝ如く怪しみたる者が多いといふ一事であります。是は大隈伯爵の識量を誤認したものと認む。大隈伯爵は政治、敎育共に熱心であるが、固より政治と敎育の別を知つて居られる。學校敎育の事業は、之を政治の外に置き敎育機關を濫用して黨勢擴張の具とするの策は斷じて執られなかつたことを明かに認める。是は世の中の具眼の人は分つて居るか知らぬが、多くは之を誤解して居つた。私は局外者である。局外者の意見は却て公平を

失はないかも知れぬに依つて、世上に向つて一言之を言明せざるを得ぬのである。

と、斯う言はれた。當時伊藤公爵の地位に立つて、此人が態々此場所に來つて此一言を述べたといふことは、多年吾々が苦んだ此早稲田大學東京專門學校の上に蒙らされた寃罪を雪ぐ上に非常の效果があつた事であると今尙私は感謝の心を以て、其當時の事を思ひ出すのであります。

五　理工科及高等學院の建設と大學認定

斯くして段々大學の第一期の事業は先づ目的を達し、豫定通り三十萬圓の寄附金も集まり、私立早稲田大學といふ形も稍々整つた譯であるので、明治四十年に廿五年祝典を行つた。この祝典の特色は理工科建設計畫の發表と大隈侯爵銅像の除幕式を同時に行つたといふことであります。隱を得て蜀を望む譯ではないが、苟も私立の大學といへば、唯だ圖書館だけで、後は扇一本で間に合ふやうな學科のみでは、どうも幅が利かないやうな感じがした、それのみ

ならず當時の時勢は……今尙然りであるが……實學の大に起らんことを希望して居る。殊に理工科の學問の盛んならんことを世の中は望んで居るから、今迄私立に於て曾て試みたことはないが、理工科の學科を置きたいものである、今少しく苦んで其仕事を成し遂げたいといふことを大隈侯爵に申込んだ。所が、大隈侯爵はそれは善いことである、至極結構な事であるから、一つやつて見なさいといふ奬勵の御言葉がありましたから、更に進んで第二期の基金募集の計畫を立て其事を發表した。第一期の時も固よりでありますが、殊に第二期基金募集の時には澁澤子爵などに非常な御世話を蒙つたのでありますけれども段々好い工合に目的が達せられて、到頭明治四十五年といふ時迄に第二期計畫も成就して、諸君が朝夕に眺めらるゝあの理工科が出來上つて附屬に工手學校迄出來るといふことになつた。明治四十五年は明治大帝の御崩御になつた年で、諒闇中でありましたから、御遠慮して大正二年に豫ねての希望は兎に角一と渡り達したといふので、比較的大規模に彼處の運動場を殘らず祝典の場所に當てゝ、而して世界の大學に紹介して祝詞を徵し、且つ代表者

出すことを請求した。所がオックスフォード、ケンブリッジ、エール、ハーヴァードを始めとして世界一流の大學が、雪に祝辭を寄せたのみならず、其代表者が其祝典に臨まれるといふことになり、集つた所の人凡そ三萬、先づ今迄にない大祝典を擧げて、茲に此大學の事業が先づ以て完成を告げたといふ譯である。

是迄は至極順調に物が進んで行つて居た、幸にして三十年間築上げ來つた地盤は、大に動搖を感ぜず、其以後に至りて、遂に政府は此大學を認めて、帝國大學と同じく、其特權に於ても、何れの點に於ても、毫厘差のない一つの學問の場所であると認めることになつた。而してそれが爲に、是は無くても宜い事であると思ふが、文部省に金を預けた、而して高等學校、卽ち高等學院は此大學に一つ位在つたのでは足りないから、實は二つでも足りない、三つ、四つ、五つあつても宜いのであるが、先づ取敢へず二つ位は造らなければならぬといふやうなことで、其當時は私は既に局外に在つたのでありまするが、私に亞いで此學校の經營の任に當られた諸君が努力されて、其等の目的も首尾好く達せられて、而して其後に於て大正七年に三十五年祝典あり、今日此四十年祝典を催す

に至つたといふことが、大體に於て早稲田大學の過去の物語である。其の大部は既に諸君の御承知の事であるが、親しく之を目擊し、親しく事に當つた私であるから、斯かる機會に於て一應諸君の前に披瀝した次第であります。

六　將來の施設と模範國民の養成

扨、過去の話はそれであるが、最後に一言未來に對する私の希望を申述べて置きたいと思ふ。前に段々申述べた關係者一同の長い間の苦心の結果、一應大學の形は出來た。出來たけれども完成したものでは決してないのみならず、今日は他の官立の諸大學と法律上、制度上對等の地位に立つことを許されたる以上は、彼に凌駕しなければならぬ。彼に劣つては勿論ならぬといふ大使命が前途に横つて居るのである。玆に於て將來に對する經營上の事業は多多あつて、中々指かゝなふるに遑ない程である。又金錢を要する經營上の事業のみでなく、教育上訓育上に於ける所の仕事も亦多々あるのであつて是亦指を屈するの遑ない程であるから、我輩の如き老骨は、是は過去の人、隨て過去

を語る人であるが、現在、未來は我輩の左右に居られる諸君に向つて、其前途の完成に大努力を致されんことを偏へに此席より希はなければならぬのである。先づ有形上の事を言つて見ても、大講堂固より造らなければならぬ。御大典記念事業として既に金を募集してあるが、未だ着手されない所の圖書館、研究室固より之を造らなければならぬ。勉強の餘暇相當の樂しみの出來る樣に學生倶樂部も無ければならぬ。今日の事務所は殆ど牢獄の如き物であつて、あんな所で事務の執れる筈はないのであるから、是亦相當に築き建てなければならぬ。教員諸君が孜々として學校に於て教鞭を執らるる側ら、偶には心のどかに遊ばるゝやうな倶樂部位造つて置かなければならぬ。斯う考へるといふと、中々將來の施設といふものは容易でないのである。又無形上の事を云へば、一言にして盡きるやうに申せば、教育の趣旨、三十年祝典の時故侯爵と御協議申上げて定めた所の此早稲田大學の教旨の徹底を圖らなければならぬ。模範國民の養成といふが、模範國民なるものは年々歳々千有餘人宛此學校から輩出する。あの人々の教育の儘で果して模範國民として完備

なりや否や、是は一考すべき値は確にある。假令今それで間に合ふとも、もう二年三年五年過ぎてそれで宜しいかは問題である。模範國民を養成するといへば時代に順應した適當な模範國民を造らねばならぬが之は如何にすべきやといふことを今一層御列席の諸君の研究を仰がなければならぬ。學問の活用といふが、活用といつた所で、言ふは易く行ふは難いので、成べく深く學理を修めて、啻に學理を學理として研究するのみならず、自ら更に進んで之を實際に應用して誤まらぬやうな人間を造出すといふことは、是亦容易な事でないのであるから、深く此處に御出でになる諸君の御研究を煩はさなければならぬ。

七　學問の獨立の意義

最後に此早稲田大學園の最高理想たる學問の獨立、今日の學問の獨立といふ意義は言ふを俟たずして、學問上外國の奴隷にならぬと云ふ事である。言ふを俟たずして學問上外國の下風に立たぬといふ事であらう。今日の學者

なる者は學問の輸入者であつて、輸出者ではどうもない、稀には輸出者がある か知れないが、多くは學問の輸入者であつて、一日早く輸入する者は、其鼻が三寸五寸高くなるといふのが今日の學問界の狀態である。之を以て滿足すべきものではないのである。全體世界大戰のあの間に日本の學問を獨立させぬといふ法はない。あの當時西洋より歸つて、私は此壇上に立つて何と言つた。今、西洋は大に紊れて居る。兩虎鬪へば一虎傷き、一虎殪る。歐羅巴の學問は暫くの間は退歩する、退歩せざる迄も進歩しない。我が日本の學問を獨立せしめて、彼れに習ふばかりでなく、彼れに教ふるの基礎を築くは此機會であるといふことは此日本に歸朝した其翌日か翌々日、此場所に於て、其當時の學生に向つて話した所である。所が惜しい哉、世界大戰は長く續いたが、其間にどれだけ日本の學問が進歩して、學問が獨立したか、私は一寸之を認むべき證據を有たないのを悲しむ。他の事は暫く措いて、我が早稲田大學は學問の獨立といふ事を、創立の其の日よりして標榜して居るのであるから、如何にして我が大學の學問を、啻に西洋の奴隷學問たらざらしむるかといふ御研究を、

此列席の教授講師諸君に願はなければならぬと私は思ふ。斯う考へて見ると、金の問題、經營の問題以外に、此教旨の徹底、教育の方針といふ事の重大なる問題が前に横つて居る。而してもう一つは何を言つても日本の西洋に及ばないのは體育である。身體の不完全である。少しく教育眼のある者が外國に遊べば皆それを認めて歸へる。斯く申す我輩もそれを認めて歸つて、其當時矢張その事を演說して居る。亞米利加へ行つて見る。英吉利へ行つて見る。其輪奐の美を極めた所の學校を見ると羨望に堪へない。亞米利加では Found it brick and left it marble. 就職の時は煉瓦である。職を退く時に其煉瓦は大理石になるといふことが總長たるものゝ誇りであると聞いたが、それは結構な事だけれども、必ずしもそんな事は羨むに足りない。プラトーンは森の中で講釋をしたさうだ。孔子は支那を浪人しつゝ三千の子弟に教へられたさうだから、必しも設備の完全を希はない。是は教育の第二義である。最も及ばないと思ふのは學生の身體である。學生の健康である。其健康を養成する爲めの設備である。西洋の之を見ると實に驚嘆すべきものであつて、

羨望に値ひするのである。此事が旨く行かなければ、日本の學問の獨立なぞは思ひも寄らぬと、斯う私は思ふ。田中穗積君が先頃歸朝されて、私に會ひました時、第一の同君の感想がそれであつた。其他二三此學校關係者の教育眼の有る者は、洋行して歸つて皆同一の感想を有つて居る。果して然らば我早稻田大學は此大講堂建設の次には運動の設備を完備するといふ事をしなければならぬ。諸君は皆自分が好む所に隨つて大なり小なり運動して身體を養ふといふことをしなければならぬ。それをしなくてはロングランに於て、長い旅に於て、目的地に達するといふことは望みのない事である。さうすると其等の點に就ても大に考慮は希はなければならぬが、併し啻に運動を奬勵するのみで健康が恢復する。身體が良くなるとは思はれない。其教育上の學生の負擔がどれだけだかといふ事も考へなければならぬ。徒に詰込主義である、徒に本讀ませ主義である。而してそれが爲に學生の腦髓が弱くなるといふ事が萬が一にも一方にあつたならば、唯だ運動を奬勵しただけでは一向目的が達せられないから、學問上の負擔と健康の關係をも能く諸君に於て吟

味を遂けて貰はなければならぬ。斯樣に數へ上げまするといふと、中々此早稲田大學が眞の意義に於て大學となり、他の國家の大學なり若くは相當の私立大學を凌駕する、假令勝たざるも負けない樣にするのには、まだ將來成すべき仕事が多々あるから、是は現在より將來に亙る諸君、私よりも年の若い此學校の教授講師職員諸君に偏へに御賴みして置かなければならぬと斯樣に考へる。

八　記念事業に就いて

大分長い御話をしまして申譯のない譯であります。私の申すことは大抵是れで盡きました。唯だ最後に先刻鹽澤學長から御話がありました此記念事業に就て、而かも其委員長たる關係よりして、此夏期に於ける學生諸君の大努力を深く私は感謝します。先頃諸君の委員を集めて、私の所感を述べて、諸君に私の感謝の意を傳へることをも御傳言して置いたから、既に諸君は其委員よりも御聞きであらうが、親しく今日茲に機會を得まして、諸君の前に立ち

ましたから、此場合に謹んで諸君に御禮を申します。私は諸君の活動を目擊したのである。三伏の暑中、夜の目も寢ずに、或は活動寫眞、或は音樂會、或は講演の設備の手傳ひをする。或はハンカチを賣り、或は寫眞を驚ぐといふ譯で汗を拭き拭きあの暑い中に、諸君は諸君の慕はれる故侯爵の記念事業の爲に盡されたことを私は親しく目擊をして、諸君の誠意に深く感激した次第であります。今度の記念事業は諸君が原動力である。我輩の一席の談に諸君が感奮せられて自ら其二百萬圓の十分の一である二十萬圓を、月に五十錢の儉約に依つて醵出すべしと決議し、加之各地方に散在し、鄕里に歸られて暑い間努力されたる、此諸君の奮發、諸君の感奮に刺戟された部分は少くない。教授講師職員總出となつて働いた。各地方の校友の如き固より學校に對するの念は熱烈ではあるけれども、各〻職業がある。各〻家族の煩ひがあるから、一日一日と遲れるのは洵に無理ならぬ事であるが、身輕き元氣の好い諸君が行つて刺戟されて、あの人々が大に活動する氣になつたのも、私は能く認める。要するに此記念事業は諸君の骨折に依つて必ず效果を納めらるゝことは疑

ひを容れないが、併し尙欣ぶべき事は此大學のTrinityとも云ふべき、三位といふべき教職員、學生、校友、是れ卽ち大學の三位である、是が一位になつたTrinityが unity になつた。此三つが一致結合して、此夏期の間に活動した。是れ程の好記念はない。是れ程此學園に好影響を及ぼすことはない。又是れ程故侯爵の欣ばれることはないといふことは、今直接に言葉を交はすことは出來ぬが、私は深く信じて疑はぬ。故侯爵亡き後に於て最も大切なるは何事であるかといふと、此學園の共同一致である。侯爵の如き大人格、この學園に臨まるゝ時は其威望に依つて學園の一致は自ら保たるゝのである。侯爵亡き後に於て最も注意しなければならぬのは其點である。若し此結合が破れて此一致が紊れるといふことがあれば、記念事業は固よりのこと、此學園は立ち所に亡びる。かるが故に心ある者は其點に思ひを馳せなければならぬが、此記念事業に依つて其一致團結が實地に行はれたといふことは、實に實に悅ぶべき事である。而して其原動力は蓋し諸君であるといふことに就て、諸君に對する私の感謝の意を益々深からしむる所以である。私は來る二十三日に此

處に居らるゝ澁澤子爵、此記念事業に非常に努力を致されて、始終吾々を鞭韃さるゝ子爵、私は實は御話する通り多年此基金募集の事に當つて、其苦勞は大分味つて居るから、餘命のあらん限り再び斯かる仕事には從事すまいと決心をして居たのであるが、澁澤子爵の懇ろなる御話に依つて、さういふ我儘な事は、故侯爵に對しては勿論であるが、現在、澁澤子爵に對して相濟まぬと考へて御引受をした譯である。其子爵が此事實の爲に八十有餘の高齡であるに拘らず、京阪名古屋の地方を遊說せらるゝことを御承諾になりましたから、御伴をして二十三日以後、暫くの間子爵と共に關西に於て此事業に運動をする積りである。どうか滿場の諸君、殊に學生諸君、夏期に於ける諸君の努力は謝するが、今後に於ても此事業の完成する迄、諸君の學業の邊のあつた折に、尙ほ此仕事に力を致し、心を致されんことを深く希望して今日の演說の終りと致す次第であります。（大正十一年十月廿日創立四十年式典に於ける演說）

總長就任の辭

早稲田大學總長
法學博士 高田早苗

一 新校規に於ける總長の意義

諸君私が此度早稲田大學總長の任を帶ぶることになりましたについて、其の儀式を今日此場所で擧ぐることになりました。此機會を利用して、今後私が此學校に臨むについて多少考へのある所を皆さんに御話をしたいと思ふのでありますが、それに先立つて先づ早稲田大學の總長なるものは如何なるものであるかといふことを此場合少し申して置く必要があると感ずる。先頃學校の根本規定卽ち校規が改正になつて學長を改めて總長とすると云ふことに極まりました。何が故に學長を改めて總長としたかと言ひますれば、

簡單に之を言現はすと、學長は單科大學の代表者支配者である。總長は綜合大學の代表者支配者である。早稲田大學は今や綜合大學になつて居るから、故に名を改めた、斯う簡單に言へば事が濟むやうにも思はれるのであるが、私の考へでは必ずしもさうでないと思ふ。早稲田大學は政府が官私平等の主義を採つた以後始めて綜合大學になつたのではない。早稲田大學は三十年祝典を擧ぐるまでに理工科を造り、大學に、無かる可らざる總ての學科を備へたと天下に宣告した其當時から早稲田大學なるものは綜合大學である。故に其當時に於ても早稲田大學は總長と學長と云ふものがありまして、今や隔世の人となられた故大隈侯が總長であられ、其下に學長と云ふものがあつて事實此學園を統率して居たと云ふ譯であります。それだから何も此度若くは近き過去に政府が制度を改めた結果、早稲田大學が綜合大學になつたのではありませぬから、前の說明だけでは聊か物足らぬやうに思ふ。

早稲田大學の校規なるものは元來私自からが起草したものである。爾來幾多の改正は加へられましたが、其始めの校規、始めての校規の草案は斯く申

す私が作りましたから、其精神には聊か通じて居る積りである。卽ち當時總長を置き、學長を置いたのは是は模範を英國の大學に取りました。英國の大學はオックスフォード、ケンブリッヂを始めとして大概チャンセロル及びバイスチャンセロルを置き、チャンセロル卽ち總長は、事實に於て學校を支配しませぬので、バイスチャンセロル卽ち副總長なるものが支配すると云ふことになつて居る、其の英國流の制度を模範とした。其の意味で故大隈侯爵は長く此學園の總長であられた。所が御承知の如くに昨年隔世の人となられ、偖てどうしたら宜からう、當り前ならばそれと同じ意味の總長を續いて置くのが當然でありますけれども、前の偉人の跡を總長として襲つて、而して此處を統率すべきだけの人は是は容易に見當る譯のものではない。多士濟々の此學園ではありますけれども、直ぐに故總長の跡を襲ふと云ふことは容易な人には出來ぬ。下手にさう云ふものを造ると云ふと所謂沐猴にして冠するとと云ふことになる、猿が冠を被つたと云ふ謗を受けてはならぬ。蓋し夫れや是れやを考へて此場合は制度を改正し、總長學長の二重制度を廢して、さうして綜合大學にふさはしき名の總長卽ち事實の支配者と云ふものを一人置かうと云ふのが今度の改正の要旨である。是は畢竟するに、亞米利加制度で、エール、ハーバートを始めとして亞米利加の大學は大概さうなつて居るのである。詰り英吉利流を變じて亞米利加流に變へたと云ふことに過ぎない。佛蘭西と云ふ國に大統領がある、言ふを俟たず亞米利加と云ふ國に大統領がある。佛蘭西の大統領は統御するけれども支配しない、英吉利の王樣と同じやうな性質のものである、統御するけれども支配しない、レーンするけれどもガバーンしない。亞米利加の大統領は事實ガバーンする、支配する。同じ大統領でも佛蘭西と亞米利加とは性質が違ふ。丁度それと同じやうで、佛蘭西の國の制度は英吉利の學校の制度の如く、又亞米利加の國の制度は亞米利加の學校の制度の如く、早稻田大學はそこらを考へまして、遂に學長を改めて總長としても、もとの意味の總長は大隈侯爵以後に無からしめたと云ふのが、今度の改革の趣旨でありますから、滿堂の諸君もよく其意味を諒解されんことを希望する。

二　古きを纏めて新しきへ

校規に於て今申上げたやうな意味で總長が出來て、遂に此處に居られる鹽澤前學長の懇ろなる推薦に依りまして、維持員會が之を容れて、私に總長になれと云ふことで、御受けをした。一體なれば鹽澤學長が總長として續いて此學園を支配されるのが當然のことである。けれども謙讓の美德に依つて、此場合先輩たる吾輩に此職を執つて貰ひたい、自分は理事として補助する、其懇ろなる勸めに依りまして、私が老軀を引提げて此地位に立つと云ふことになつた譯であります。考へて見ると、是程時代錯誤はない、アナクロニズム極まる譯である。時代は言ふ迄もなく古きより新しきに進みつゝある、又大體に於て新しきへ進むのは結構で、さうならなければならぬ。其場合に最も古き吾輩が總長となると云ふのは言ふを俟たずして是は時代錯誤である、アナクロニズムである。何が故に吾輩が選まれたか。竊に自から其意味を理解するに苦んで居たのでありまするが、遂に私自身だけは其意味を發見した積りで

ある。どういふ意味合か、無論時代は古きより新しきに進みつゝある。此場合に古きを纏めて新しきに渡すには、古い中の最も古い古參者たる吾輩が宜からう、斯う云ふ意味であらうと思ふ。さう理解して私は早稲田の四十年の過去、此過去を引提げて之を取纏めて新しき時代、新しき人物に引渡すのを以て私の使命とする心得である。此頃は世の中に新舊の爭が仲々盛んである。是は今に始まつたことではない。時代々々に依つて稍や盛んなる時と又左程盛んでない時とあるが、今日は新舊の爭が、可成り盛んである。古いものが宜いか、新しいものが宜いかと云へば、先刻も申した通り言ふを俟たず新しいが宜いのである。唯併ながら突如たる新し味は何等の價値はない。突如たる新し味は元來あり樣のないものである。過去は未來を生むので、過去なしに未來のあり得可きものでなく、古きことの上に築かれたる新し味でなければ眞の新し味ではない。突如たるやり方で物事をやつて行くのでは是は革命である。過去と未來の連絡を付けて徐々と進めて行くのが是が改革である、リフォームである。何れの時代、何れの社會でも古きが上に或るものを加へ

つゝ新しき時代へ進んで行くと云ふことでなければ健全なる發達發展は遂げられないのであります。私はそれを眞理と考へるが故に早稻田大學の過去、此過去を自然々々と新しき時代、新しき人々に渡すと云ふことを以て自分の任務としようと、斯樣に考へて居る。

三　有形的にも無形的にも內容の充實及整頓の時代

さてさう云ふ意味で總長になりましたが、どう云ふ仕事をしたら宜からう、どう云ふ方針で是れから事に當つて往つたら宜からうと、斯う考へて見ますると、是は此の學園の四十年祝典の時に旣に私は諸君に向つて申して居る。今や此學園は內容充實、內容整頓の時代である、斯う申して居る、是は私が今始めてさう氣がついた譯ではない。抑も三十年間は此學校を擴大し此學校を發達させると云ふことに努めたのでありますが、三十年祝典の時に此演壇に立つて熱々考へた。發展と云ふことは此邊で止めなければならぬ、玆に於て

更に方針を轉じて內容充實、內容整頓と云ふことが、此學校の方針とならなければならぬ、斯う其當時に考へたのである。實際當局者は段々變つて居りまするが、何れの當局者、過去の學長の方々は皆同樣に考へられたに相違ない。同樣に考へられたけれども、幸か不幸か、いろ〳〵な事柄があつて妨げられた。此事實の大學を名義の大學とする爲めには文部省に對して巨大なる納付金をする必要が起つた。又高等學院の一つのみならず二つ迄造らなければならぬといふ必要が起つた。當時の當局者は其事に忙殺されて、十分に未だ內容充實を計るだけの餘裕がなかつた。續いて大隈侯爵の薨去となり、更に其侯爵の記念の爲めに記念事業を經營すると云ふことになつて、如何にも過去十年間は此早稻田學園は頗る多事であつたから、どの學長も內容充實內容整頓の必要を深く感じて居られたのであるけれども、未だ其遑が十分になかつたと斯う見なければならぬ。此場合に私が再び局に當つたのでありまして、差向き發展の爲めにしなければならぬと云ふ仕事がない譯ではないが、必らずしも爲さなければならぬと云ふ場合でないとして見れば、此時此場合に於

て、どうしても內容充實、內容整頓を計る必要がある。又それをしなければならぬ。內容整頓、內容充實といつた所でいろ〳〵な事があります。無形的の事もあれば有形的の事もある。どちらも容易なことではないが、併し此場合有形的のことをやり遂げると云ふことは、是は又實に困難な事である。けれども是れとした所で少しも手を着けぬ譯にはいかぬ。記念事業、大講堂の建築、記念講堂の建築と云ふことは我々と諸君と一致合體して今日迄骨折り來つたので其實現は遠くない。是又有形的の內容充實の最も大なるもの、一つであるが、夫ればかりではない。彼處に見える所の圖書館、此圖書館なるものは始めて此大學を造ります時分に、私の主義として大學は無くなつても講堂は無くなつても圖書館があれば大學と云ふもの、生命そこに存する、それ故に教室を造るよりも先きへ圖書館を造らなければならぬと考へたものが、今見れば極めて貧弱な圖書館である。迚もあれで何時迄も研究を生命とする學府の圖書館及び研究室と云ふものを足れりとす可き場合ではない。あれで滿足しては居られない譯であるから是も過去の當局者は疾うに氣がつ

いて其爲めに資金も集め、さうして研究室圖書館を相當の規模の下に造ると云ふことであつた。所が不幸にして物價は大いに騰つた。其計畫の始めから比較して見ると二倍三倍四倍も物價が高くなつたのである。迚も集めた金では出來ぬと云ふので、據所なく此金の利殖の方法を計つて今日迄居るのであるが、是は一日も早くやらなければならぬ。一方に於て大講堂固より必要、又故侯爵の記念の爲めの神聖なる計畫であるが、大講堂が先きに出來ても此研究を生命とする場所に於て研究の機關、圖書館と云ふものが、此體裁では到底我慢が出來ぬ譯であるから、如何に困難をしても、是は先づ着手しなければ相成らぬと決心をして居る。

其他數へ上げたならば有形の事多々ありませうけれども、却々さう出來る譯のものではない。併し計畫は立てゝ置かなければならぬ。計畫を立てゝ將來是れだけのものは必要だと云ふ其計畫は確に立てゝ置いて、世の篤志者同情者を待つ。其人現れゝば、何時でも其事柄が擧がると云ふだけにして置かなければならぬと考へて居る。是は先づ有形的の方面の話であるが、無形

の方面にも爲すべき事は多々あるので、他日の機會に諸君に御話をしたいと思ふが、實に一にして足らないのである。兎に角此の場合は私の仕事としては內容充實、內容整頓、之を以て自分の仕事としなければならぬ、又他の理事諸君、同僚諸君と共に其事に熱心し、鋭意して實現を期さなければならぬと斯樣考へて居る。

四　最高等有機體として凡べてを自治的に

次に私熟々考へるに、此早稲田學園も實に大きくなつたものである。今は工手學校の生徒を計入しますと、現實に一萬四千と云ふ多數を此學園は包容して居る。日本に於いて最大なる學園である。世界に於ても、數だけでは蓋し最大なる學園であらう。或る場合に私も考へた。私が直接に事に當つて居た時分には是程大勢ではなかつた。一萬と稱したが、事實は一萬は居なかつた、先づ七八千と云ふ所であつたと思ふが、どうも是は餘り大きくし過ぎやしないか、大きく成り過ぎやしないか、斯う自から深く責任を感じたのである。

今でも世間では一體早稲田は餘り人を集め過ぎるではないかと云ふ者は必ずしも無きにしもあらずと思ふ。是は尤なことである。けれども是はよく考へねばならぬ、卽ち、したのか、なつたのかと云ふことを考へなければならぬ。私はしたのではない。なつたのだと思ふ。何となれば大なる學園、一萬以上の學生を包容して居る所は早稲田のみではない、慶應又然り、私が局に當つて居た當時の慶應は今の三分の一位な學生であつたと思ふが、何時の間にか是も亦萬餘の學生を包容する大學となつたと云ふことを考へて見ると、是はまだ日本に於て高等教育を與へる機關が少ない爲めで稲田も自然の勢で是れだけの大學となつあると言はざるを得ぬ。それで早

總長室に於ける高田總長及田中理事

たと見るのが當然である。兎に角なつたものは御互に致し方がない。さうすれば此なつたのは宜しいが、之をちやんと纏めて行かなければならぬ。故侯爵が常に言はれた、學校は有機體であらねばならぬと、固より有機體であらねばならぬ、唯有機體ではいけないのである、高等の有機體であらねばならぬ否、最高等の有機體であらねばならぬ。諸君の如き知識あり學問ある者が集つて團結をなして居る。是が最高等有機體でなくて天下何れに向つて最高等有機體を來めることが出來るか、どうしてもさうしなければならぬ。どうしたらさうなるか。今はまだ最高等の有機體であるか、どうか、吾輩にも多少疑ひがあるが、諸君にも多少疑ひがあらうと思ふ。最高等と言へるや否や。けれども假令最高等ならざるも愛校の精神、愛學園の精神の漲つて居るとは確かである。何で私はそれを知つたか、此間の所謂騷擾、一體文字それ自身が餘り穩やかでない、聊かの行違ひはあつたには相違ない、其聊かの行違ひを世間騷擾と稱するのであるが、御互は行違ひと見て置くべきものである。此行違ひに依つて私は愛校の精神の依然として漲つて居ることを知つた。何と

なれば、軍事研究團と云ふ團結が、其團體を解くに當つて何と言つた。自分等は別に悪いことをして居るとは思はない、必要な研究をして居る積りである、が形式が誤解を招いて遺憾である。學校の平和の爲めに、學園の平和の爲めに之を解くといつて自から之を解いた。其對手と見做されたる文化研究團と云ふのがありますが、其方面は何と云つたか、其方面は自から顧みて疚しき所はないが、學園の平和の爲めには代へられないから之を解散すると斯う言つたではないか。右も左も前も後もあゝいふ爭の場合に、自分の愛する團體を解く、何の爲めに解いたかと云ふと學校學園の平和には代へられぬといつて解いた所を見れば、依然として此早稻田學園に於て愛校愛學園の精神が漲つて居ると云ふことは、恐らく私の考へ違ひではあるまいと思ふ。

それならば宜いかと云へば、先刻も申した如く、まだ最高等の有機體には少しなり兼ねて居るか知れないから、諸君と我々と何とか方法を考へ手段を盡して最高等の有機體たらしめる。それは何でもない、我々の意志が諸君によく疎通して、諸君の考へが響の如く我々の胸に響いて來さへすれば卽ち最高

等の有機體になれる。よく學生に臨むに取締の二字を以てするのであるが、私は前に學長たりし時に於ても、此取締の二字を忌んだのである。苟くも大學の學生が人に取締られて、假令當局者と雖も、それに取締られて而して落着いて居るなぞと云ふ腑甲斐ないことでは駄目である。今後共に取締の二字は恥辱の文字であると私は思ふ私は諸君の卽ち學生諸君の自治的精神に訴へる。學生は自治でなければならぬ。如何にしたならば自治制が理想的に實現されるかと云ふことを諸君が大いに研究すれば宜しい。諸君が理想的に自治團體を形造る、諸君の委員が夫を代表するに足るだけの委員であり、さうして我々と相會して意思を疎通し意見を交換すると云ふ仕組がよく立ちさへすれば此學園は最高等の學園になるのである。それはどうしてやるか、斯うしてやるかと云ふことは、今此處で一々考を述べる譯にも行かず、又私一己の考が決して宜い考でもないのであるから、我々も考へるが、諸君も其點は篤と考慮して、而して此學園、一萬四千の學徒を有して居る此大學園を、理想的の學園たらしめる、最高等の有機體たらしむるやうにしたいと斯う希望する。

五　自由研究と同時に教育の場所

次に一言申して置くことは此學園なるものゝ性質である。大學は研究を以て生命として其研究は自由でなければならぬ。誠に其通りである。けれども大學其者は研究の場所のみではない、少なくとも今日の日本の大學は單に研究の場所のみではない、研究の場所であり、同時に學問の場所であり、同時に教育の場所である。例へば獨逸の大學の如きは、教育と云ふものは其下の機關で十分整つて居る。大學は單に自由研究の如き場所である。亞米利加の如きは、大學其者が恰度日本の大學と同じで研究の場所であり、教育の場所である、同時に學問の場所である。私は斯う解して居る。國に依つて違ふ、國に依つて學問の制度が違ふ、斯う私は解して居るのである。日本は恰度亞米利加と同じ樣である。今日の學制が善かれ惡しかれ、私は餘り善いとは思はぬ、是に付いては意見もあるが、善かれ惡しかれ今日の日本の制度では大學其物は研究だけの場所ではない、さうあつてはならない、兼て教育の場所であり、

兼て學問の場所である、勢ひさうでなければならぬ。それであるから、此學校にはちやんと分級の制度と云ふものが立つて居る、是は學問、教育といふ上から來たものである。又此學校の教旨と云ふものに顧みて見ても分る。模範國民を養成する、學問の獨立は研究に依つて現はれる、模範國民を養成する、造就すると云ふ以上はこゝに教育といふことが少なくとも含まれて居ると見なければならぬ。教旨に照し、學制に照して私は固より研究の場所であると同時に教育の場所、學問の場所であると斯う解釋する。

六　學ぶに順序あり

それで其解釋が正しいと云ふことになればいろいろ考へなければならぬ。例へば諸君は皆專門に志す、無論諸君の專門の範圍は何事にも在學中に通じなければならぬ。專門の事のみでない例へば今日の思想問題、古き事も知らなければならぬ、新しき事も知らなければならぬ。凡そ世の中に盲目程危險なものはない、盲目程危ないものはないのであるから、何事も知らなければな

らぬ。けれども古いこと新しいこと、斯う竝べて見る。古い事は陳腐か知らんが皆實驗を經て居る、新しいことは、趣味が深いか知らんが、實驗をしてないものが多い。故に往々新しきものに危險性があると言つて老人達が心配する。さう考へると何事も教へなければならぬ。知らしめなければならぬが、知らしめるのに順序がある。諸君も又學ぶに順序がある、先づ古きことより學んでさうして新しきことに及ばないとならぬ。此順序を極めて尊重しないと其間に間違ひが起ると云ふことになる。此學ぶに順序があると云ふことは無論此處に御出でになる教授講師の諸君は十分に御諒解になつて居るが尚ほ御注意を願ひ、又學生諸君も自ら學ぶ上に於て大いに注意されんことを希望する。

七　學園は實行の場所にあらず

尚一つ諸君に御話して置かなければならぬ。學問は教育の場所であり、學問の場所であり研究の場所であるが實行の場所ではない。是れだけはよく

諸君は記憶して置かれたい。昔し私が局に當つた時に大分世の中に政治上の爭が甚しく若い人達、學生の人達は面白いから、いろ〳〵な會合に臨んだ、大分問題を惹起した。其時に私は斯う云ふ場所に立つて話をした。昔の劍術の先生、柔術の先生が、自分の門下生未だ卒業もしない人間卽ち免許皆傳を得ない人々に他流試合をすることを許した例があるか、若しさう云ふ先生があれば實に不心得千萬である。本當に卒業して居ない者に、何處へでも行つて他流試合を勝手にして來いと言ふ、さう云ふ先生であつたならば、丸でこれは敎育を知らない。如何に宮本武藏が二刀流であらうと、荒木又右衞門が柳生流であらうと、先生たるの資格はない。習つて居る間、學んで居る間はまだ未熟である。未熟であるからそこで學んで居るのである。此未熟の者が外へ出て實行に關係するは危險是れより大なることはない。又其本分に背くの甚しいものである。今日思想問題、いろ〳〵の問題、其研究は順序を得れば宜しいが、苟くも學園に居る內に事が實行に亙ると云ふことは、其本分に背く行爲であるのみならず、自から守る上に於て頗る危險千萬なことであるから、學校

も大いに戒めなければならぬが、諸君も相互に戒しめて、さう云ふことのないやうに固く心掛けて貰はなければならぬと云ふことを諸君に一言して置く。

八 學園の一致團結を切望

先づ以上申上げたので……隨分長くて御氣の毒であつたが……大抵私の此場合に思ふ事だけは述べた積りである。尤も此後は度々諸君に御目に掛るから尙ほ言殘したことは其の場合に申せば宜しいのである。世の中に不言實行と云ふことを大層尊ぶ人があると云ふことがある。此不言實行と云ふことを又是に反對する人がある。一體事をなすには其前に方針をちやんと示して、內閣などは殊にさうだが、我は斯くやるのである、斯う示してそれに基いてやらぬと云ふことは元來卑怯であり又非立憲であると。是は一應尤な說である。私も不言實行は餘り感服をしないから聊かでも方針を御話したのであるが、併し不言實行は惡いか知らぬが、多言不實行は頗る是は感服しない。餘り此場合に多く諸君に向つて御話をして多言不實行の謗を諸君から受ける

とは宜しくないから先づ此邊に止めて置かうと思ふ。唯最後に諸君に切に望むことは學園一致團結の必要である。大隈侯爵が歿くなられて此處においでになる我尊敬すべき澁澤子爵、始終此學園の爲めに配慮される澁澤子爵とともに、又當時の學長鹽澤博士とともに此處に故侯爵を追懷する演說を私がしたがある。其後も記念事業の場合にも申した侯爵なき後の學園の根本の必要は教職員校友學生總ての共同一致、一致團結と云ふことにある。之を夢の間も忘れると學園は瓦解する。一箇の偉大なる人が統率して居た其重しがなくなつた學園であるから、是は銘々が自ら夢の間も一致團結と云ふことを忘れてはならぬ。私はこの事を機會ある毎に諸君に申したことは諸君も未だ記憶に新たであると思ふ。諸君はよく私の趣旨を過去に於て體せられてそれを實行せられた。それがどう云ふ場合かと云ふと記念事業である。其意味に於て諸君に屢〻私は御禮を申したのである。即ち三伏の暑に教職員校友諸君は固よりであるが、全部の學生が家に晝寢して居ても暑くて堪らぬ時に、日本中、植民地まで駈廻つて侯爵記念事業の爲めに盡力された。此直

接の贈物固より大であるが、此間接無形の結果は實に掬す可きものであつた。教職員校友學生一致團結の精神が此事業の上に現はれたと私が諸君に向つて喜び且つ謝したことは諸君が御承知のことである。諸君は此精神を今後共決して忘れないやうにしたいのである。私は六十有四、澁澤子爵の前では餘り威張れないのであるが、竝の人の前では六十四は頗る老人であつて、大いに老人たることを威張れるのである。六十有四と云ふ年で、老軀を引提げて此學園の重責に當る。此重責に當るの力草は何であるか、何の力に依つて此重責を果さんとするか。外ではない、教職員校友學生の一致團結の後援に依つて、援助に依つて、此職責を全うするより外に道はない。吳々も此場合に於て御列席の教授講師職員又校友諸君に御願をするのは、どうか此一致團結の精神を盛んにして私に援助を賜はつて、而して大過なきやうに、此職責を完うさする樣返す〳〵も懇願を致す次第であります。（大正十二年六月二日、總長就任式に於ける演說）

皇室の恩寵と早稻田學園

（皇太子殿下御成婚奉祝式に於て）

早稻田大學總長
法學博士　高田早苗

一　本大學の奉りし賀表及賀牋

今日は殊更に申上げる迄もなく、皇室に於て御慶事の行はせられる其日であります。此の御慶事に對しては諸君と我々苟くも早稻學園の學徒たる者、滿腔の熱誠を以て御喜びを申上げつゝあるのであります。併し心の中だけでそれを祝賀するのでは頗る物足らぬと考へて、諸君と此場所に會合し我々の心中の喜びをここに發表したいと考へて此集會を催した次第であります。私は昨日宮中に罷出まして、此度の御慶事に付いて滿堂の諸君を代表し天皇陛下　皇后陛下に賀表を奉り又　皇太子殿下同妃殿下に對して賀牋を

奉りました、それを先づ以て諸君の前に於て讀上げたいと斯樣考へます。

賀表

臣早苗　誠惶誠喜頓首頓首

謹テ奏ス恭シク惟ルニ

兩聖陛下日月竝ビ懸リ乾坤德ヲ合セ給ヒ國家休祉ヲ重ヌルコト十有三年茲ニ又

皇儲大婚ノ儀ヲ擧ゲサセ給フ

皇猷ノ愈〻宏ク國運ノ愈〻隆ナル豈ニ窮リアランヤ

臣早苗　誠惶誠喜頓首頓首謹テ奉賀ス

大正十三年一月二十六日

早稻田大學總長
正四位勳一等
法學博士　高田早苗

是は昨日奉りまたし賀表であります。次に讀上げますのは賀牋であります。

賀牋

臣早苗　誠惶誠喜謹テ白ス

伏シテ惟ルニ

皇太子殿下仁孝叡明

妃殿下秀慧婉淑茲ニ甲子ノ嘉歴新正ノ吉辰ヲテテ成婚ノ大典ヲ擧ゲサセ給フ四海好逑ヲ頌セサルハナシ

皇猷ノ彌〻昌ニシテ民祉ノ益〻滋キ亦將ニ窮リナカラントス

臣早苗　誠惶誠喜謹テ奉賀ス

大正十三年一月二十六日

早稲田大學總長
正四位勳一等
法學博士　高田早苗

此賀表及賀牋を持參致し、宮中に罷出て、大臣官房に於て其掛りの人に諸君を代表する意を述べて差出しました所が早速　階下殿下へ申上げると云ふことでありました。

二　特に我學園の蒙りたる恩寵

偖此度の御慶事は先刻も申しました如くに日本國民たる者何人も之を喜ばざる者のないことは勿論でありますが、殊に早稲田學園の學徒、國家の元勳であり且皇室の重臣であつた前の總長侯爵が創立せられた此學園の學徒たるものは、もし其事が可能事であるならば、一般國民が喜ぶよりも一層深く喜ばなければならぬと思ひます。深く且つ深く此事を喜ばなければならぬと私は諸君と共に考へるのであります。

此學園と皇家との關係は前申しましたる前總長侯爵の身體を通して極め

て密接でありますけれども、而已ならず尚其上にも皇室は此學園に特に恩寵を垂れさせられたとは、諸君が已に業に御承知のとでなければならぬ。先年此學園が綜合大學の實を擧げました時に、既に有る所の科目の上に從來私立大學としては殊に難しとする理工科迄設けると云ふとになつて、事實の上に綜合大學と云ふものが成立つと云ふとが示された時に　明治大帝は此學園に對して莫大なる賜物を下されました。其賜物に依りまして恩賜紀念館が彼所に聳えて居ると云ふとは是は殊更私が申す迄もないことである。尚其上に唯今の　天皇陛下、其當時は皇太子で在はしましたる所の今の　天皇陛下には此學園に玉歩をまげられまして、教授講師諸君が學生諸子を教へ導く其實際を見たいと仰せがあつて、各教室に迄御入りになつて授業の實地を御覽遊ばされたとは、是又諸君が今尚記憶して居られ、又居られなければならぬ最も大切な事實である。其當時の光榮ある事實は彼處にある所の御手植の月桂樹が物語つて居るのである。又故侯爵がなくなられました其爲めに諸君と共に記念事業を起した時に　天皇陛下が聞召されて、又々莫大なる恩賜

金がありました、この事も亦諸君がよく御承知のことである。

三　東宮殿下と故大隈總長

斯の如く我學園と皇室との關係は實に密接である、否我皇室のこの學園に對して深き恩寵を垂れ給ひしことは前の事實に依つて的確に證明せらるゝ所である。又故侯爵と、今日御成婚の式を擧げさせられる所の　皇太子殿下との關係と云ふものも諸君はよく御承知の事柄であらう。故侯爵は　陛下に御仕へ申さ傍ら殊に心を籠めて　皇太子殿下に奉仕せられたのであります。皇太子殿下には侍講とか侍讀とか申す方々があつて、御學問上の事に付いて種々御指導申上げたのであるが、我侯爵前總長も亦　皇太子殿下に對し自分の過去の豐富なる經驗に依つて得來つた事に付いて御話を申上げるとは無益でないと斯う考へられて、屢〻東宮御所へ參られ、長き時間、先づ早稲田大學で言へば科外講師と云ふやうな資格で、いろ〳〵實驗上學問上の御話も申上げたのであります。而して皇太子殿下が外遊遊ばされる時には、我侯爵

は殊に心を用ゐられ、屢々殿下に拜謁を致し、萬一の御參考になるべき事柄を申上げて頗る御嘉納があつたと云ふことは、私が親しく故侯爵から聞きました所であります。さう云ふ次第でありますのに、殿下御歸朝の時には侯爵既に病篤く拜謁することも出來ず、其後終に他界の人となつたので、殿下は再び大隈の顏を見ることが出來ぬと深く御嘆き遊ばされ惜しまれ給うたと云ふことを、私は新聞紙上に於て其當時讀み今尙記憶して居る次第である。

右申上げる如く此學園と皇室との關係は種々の點に於て極めて密接であるのみならず、創立者たる侯爵其人と攝政殿下との此關係も實に深きものであると云ふことを、諸君はよくよく承知されなければならぬ。其殿下が今日御成婚の式を擧げさせられると云ふのであるから、先刻も申す如く、日本國民何人も之を喜ばぬ者はありませぬが、若し一層深く喜ぶといふ特權を有することが出來得可きことであるならば、一般國民よりも更に深く〳〵御互は此御成婚、此御慶事を喜ばなければならぬと私は深く感ずる。

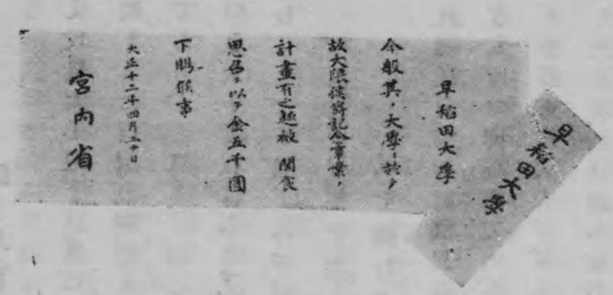
四　東宮殿下の御高德と我國體

又我皇太子殿下は實に英明にましまして而かも勇武にまします。皇太子妃殿下また貞淑の御聞え高く在しますが故に、將來に於て其御內助の力頗る大であらうと思ふ。而して皇太子殿下は殊に此國民を平生深く愛させ給ふ所の皇太子で在はします、今年の御勅題は御承知の如く、「新年言志」、其御勅題に對して皇太子殿下は如何なる御歌を御讀みになりましたか。

新玉の年を迎へて彌增すは
民を憐む心なりけり

此國民を憐む、此國民を慈しむと云ふことが皇太子殿下の夜も晝も忘れ給はざる所の御一念である。其御歌に付いて始終親しく殿下に奉侍して居られる珍田東宮大夫が斯う云ふ談話を發表した。是は新聞の上に載つて居りましたのを、私は茲へ切拔いて持參致したのであります。それを諸君の前で讀上げて見ようと思ふ、其珍田大夫の話に

「昔から名歌は自然の感情を自然に表現するとは豫てから聞いたところでありますが、このお歌はよく殿下が平生の御所懷を自然のまゝに發表されたことゝ拜察致します。それは小官が殿下の御側に奉仕して居ります所から、殿下の御感想に照らして自然の御發露だと云ふことが最も明瞭であるのであります。試に最近の一實例を申しまするならば客臘井七日虎之門に於ける不敬事件の當日赤坂離宮で殿下に拜謁しました際に、殿下はこの事件に關していろいろ御物語りがあらせられた末に、極めて沈痛な御態度を以つて、次のやうな御感想を御洩らしになつたのであります」



五千圓御下賜の御沙汰書

我國にあつては皇室と臣民との關係は義に於ては君臣であるが、情に於ては親子たるべきもので、予は平素この心を以て心とし、常に想ひを君民の親愛に致して來たとであるのに、今日の出來事を見てこの非行を敢てしたものが陛下赤子の一人なることを知るのは洵に意外の感に耐へぬことである

小官はこの有りがたいお言葉を拜して恐懼感激の情が胸に迫り暫しお答への言葉が出ずたゞ感涙に咽んだ次第であります。と珍田大夫は申されて居ります。此お言葉を直接に承はつた珍田大夫の恐懼感激は固よりのこと、間接に之を拜聽した諸君と我々も是に就いて恐懼感激せずして何事をか恐懼感激するとがありませうか。我早稲田學園は申す迄もなく、皇室中心主義の學園であります、此學園の創立者大隈侯爵が皇室中心主義の人でありまし

た。侯爵が先年冠を掛けて憲政に寄與する爲めに始めて政黨を組織した時、其政黨の綱領に第一如何なるとを掲げられたかと云ふと、『皇室の尊榮を保ち國民の幸福を全ふす』と道破した侯爵は其目的の爲に政黨を造つたのである。それと前後して今の早稲田大學、其當時東京專門學校と名づけた此學園を造られたのであるが、卽ち此政治上の主義を同時に教育上に及ぼし、根柢より此皇室中心主義の基礎を固めようと侯爵は考へられたのであります。其目的造の爲つたに此早稲田學園が皇室中心主義であると云ふことは、今更申す迄もないと私は確信するのであります。

又此學園に限らず日本國民たるものは何人も皇室中心主義であらねばならぬ。是は必ずしも多くの言葉を用ひなくても、我々の理智で判斷してさうでなければならぬと云ふことは忽ちにして分らなければならぬ。我國家は皇室を以て本幹とする、我々國民は其枝葉である。是は歴史が證據立てゝ居る所の的確なる事實である、皇室は本幹にして國民は枝葉固より同根より生じたものである。これは如何なる歴史家も否定の出來ぬ所である。これ史

學の上から證明し得る所の事實であると私は思ふ。果して然るならば、本幹衰へて枝葉盛なる道理があり、ませうか。幹が衰へて枝葉が繁茂すると云ふ道理はない。理智の上から考へて皇室と國民とは一つものであつて其中心が皇室である。卽ち我日本は模範的大家族的國家である、又標準的の民族的國家である。是が卽ち我日本の國體と稱するものである。是が卽ち歴史上から考へても道理の上から考へても動かす可からざる此國家の形であつて卽ち是が國體である。此國體を未來永遠に保持する爲に努力する、其ために努力する働きを稱して忠君愛國と斯樣申すのである。併しながら茲に一言附加へなければならぬ、今申した道理よりして我々は飽迄も忠君愛國的の努力を致さなければならぬのでありますけれども、其忠君愛國と云ふ事も昔と今と心得に於て多少の違ひがある。憲政布かれ立憲國家となつた此日本に於ては、我々の忠君愛國と云ふものは受働的であつてはならない、主働的でなければならぬ。唯屈從的であつてはならない、寧ろ進んで翼贊的でなければならぬ。陛下殿下を輔け奉つて我君を我々の努力を以て益々堯舜になし奉

つると云ふ此積極的主動的の忠君愛國でなければならぬ。是が諸君と我々との覺悟でなければならぬのである。

五　中大兄皇子と我攝政宮殿下

偖甚だ恐れ多いことでありますが、今日は成婚の式を擧げさせられる皇太子殿下、まだ御若い、御身であらせられるに國の政治の上に立つて之を指導せらるゝ攝政と云ふ大任を負はせられた此皇太殿下、この御方を我國の歴史過去三千年、其間の君主若くは皇太子の如何なる御方に比較すべきであらうか。無論列聖は皆我々が尊敬すべき君主のみでありまするけれども其中で我皇太子殿下と比較すると云ふことを若し許されるならば、私は如何なる御方よりも天智天皇に比較し奉るが至當であると思ふ。天智天皇、中大兄の皇子として知られたる此御方は、皇太子として長い間國家の爲に盡され而して又元首として。國家の爲めに盡された御方である。御歴代の中に於て實に偉大なる御方の一人であつた。若し西洋風の歴史家が筆を執つて書くならば

The Great 我明治大帝と同じく大帝と稱し奉つて然るべき御方であります。

天智天皇は皇太子として長く國の爲に御盡しになつた。皇極、孝德、齊明の三天子の政を輔けて而して大事業を仕遂げられた。是は諸君の御承知の事である。其事業はいろ〳〵ありますが、彼の蘇我入鹿を誅して權臣の專横を抑へたと云ふこともある。又恰度其時に支那大陸は一統されて唐と云ふ大國家が起つた、且唐が朝鮮半島へ手を出して新羅と提携して我同盟國の百濟を亡ぼさうとした時に當つて、此百濟の背後に立つて敢然として之を支へることに努められたと云ふこともある。殊に大化の改新、大化の新政と云ふことに付いて非常に骨を折られた御方である。天智天皇の事業の多くは皇太子たりし時に於て爲されたものである。是等の事實より推して見て、私は皇太子殿下の模範となるべき御方を過去に求むるに於ては此中大兄皇子、後の天智天皇と稱し奉つた御方であらうと思ふ。又其御方の如くに在はしますことを深く私は諸君と共に希望するのであります。

六　大正維新の秋

多く申す迄もなく天智天皇の時に當つて改新の必要があつた如くに、今日又改新革新の必要がある時代である。大化の改新、大化の新政が古へあつた如くに、今日は大正維新と云ふことの必要があると云ふのは、是れ蓋し輿論であつて、何人もさう考へて居るのである。曾て英吉利の政治家ジョン・モーレーが貴族院問題に付いて述べた時に、貴族院が自ら民意を容れてメンドしなければ遂にエンドとなると申した事がある。當時 mend or end といふ言葉が流行語となつたといふことである。卽ち之を飜譯すれば「直すか、倒すか」といふことになる。凡て何事でも、世の中に不合理なことがあれば、其不合理なことを上に立つ階級が自から直さぬと倒される虞がある。固より我皇室我國家に end のあるべき筈はないが、其國家の中の制度等に就ては改革の必要が時々起つて來るのである。今日の急務は着實穩健なる手段に依つて社會の上流中流に立つ者が、自から先んじて不合理的な事柄を直して行くといふこ

とである。千歲不磨の寶典である所の帝國憲法の範圍内に於て、何事でも若し不合理のことがあれば、直して行けるのであつて、之を直すと云ふことが大正維新と云ふ意味に外ならないと思ふ。皇太子殿下は大正維新の實を擧げる爲めに、今攝政として御立ちになつて居ると申しても然る可きである。我々も又先刻申した通り、唯々消極的服從に甘んぜず、積極的に、活動的に　陛下殿下を輔翼し奉つて、爲す可き改革を爲し遂げて大正維新の實を擧げなければならぬ。必らずや皇太子殿下は其昔中大兄皇子が大化の改新を成就された如く、必らず此大正維新の大目的を達せられると云ふことは私が深く信じて疑はざる所であります。

最後に申上げることは、先刻も御話をした如く、我が前總長大隈侯爵は所謂蹇々匪躬の誠を致して、あの長い生涯　陛下の爲に盡されたのであります併しながら是は既に過去の事である。私如き誠に微々たる一身と雖も今より三四十年前よりして、或時は議會に於て、或時は又暫時でありまするけれども親しく　陛下に仕へ奉つて駑鈍を顧みず、此心持を以て陛下に奉仕したの

でありますが、是又多く過去の事である。偖將來に亙つて此國民を導き給ふ皇太子殿下の下に立つて積極的に殿下の政を贊翼し奉つり、將來益々此國家の興隆の爲に努力し、忠君愛國の實を積極的に擧げると云ふことは、是は果して誰の任務でありませうか。此席の大多數を占めて居られる所の若き我學園の學徒たる諸君の任務であると私は思ふ。此學園と皇室とは前申す如くに實に深き〳〵關係があり、其恩寵を蒙むること實に大でありますから、其關係深き學園に生立つた諸君は、我故侯爵、我故總長が過去に於て盡されたと同じ志を以て、此國家の爲め、攝政殿下の御爲めに滿腔の熱心を以て贊翼の實を擧ぐると云ふ此任務を、夢の間も忘れられざらんことを、此機會に於て私は諸君に特に勸告したいと思ふのである。

今日は目出度き式日である、唯辭令を述べれば事が足りる譯でありますけれども、私は諸君と共に擧げつゝある所の此式をして成る可く意義あらしめたいと斯樣考へまして、聊か式其者には不似合なる論議を挾んだ、是は或は當を得ないと云ふ非難があるかも知れませぬが私の志は空虛なる儀式よりも

寧ろ有意義なる式を諸君と共に擧げるのが　兩陛下兩殿下の思召に適ふことであると斯う考へまして以上申述べた次第であります。

私の申上げることは玆で終を告げますが、諸君と共に君ケ代を唱へて而して更に私の發聲に依りまして　兩陛下兩殿下の萬歲を唱へることに致し、此式を終りたいと思ふのであります。

（大正十三年一月二十六日皇太子殿下御成婚奉祝式に於て）

高等學院と高等學院生

早稲田大學總長
法學博士 高田早苗

一 學校創立當時の三老人

唯今中島院長から御言葉添がありました通り、總長になりまして一度は特に第一第二高等學院の學生諸君に御目に掛つて御話をしたいと豫て思つて居つた。中央校庭に於ける訓示は度々御聞きになりましたらう。諸君の居られる所で、特に諸君に向つての御話、是も一度は必要と思つて、餘程前から其機會を造らうとして居つたのでありますが、震災や何かの爲めに遂に今日迄後れた次第であります。兎に角地震、雷、火事、親父と云ふが、親父だけは取除けであるが、地震も雷も火事も碌なものではない。總て人の仕事を遲らせると云ふことは諸君と共に遺憾とする譯であります。ところが、さう云ふ意味で、今日出ましたけれども、此の頃身體が悪いので、餘り諸君に對して效力ある有益な御話は出來ぬかも知れない。諸君は私を大分老人と見て居られるか知れないが、まだ僅に六十五である……恰度此間、先月十五日でしたが、餘震中の大震があつた時に、私は少し身體を養はうと思つて、坪内博士が熱海に居られるので、伊東の溫泉から廻つて熱海に行つた。すると其處へ坪内博士の考で態々市島名譽理事を呼迎へた。此坪内名譽教授市島名譽理事と私と云ふものは早稲田の創立の時から居る三老人である、而も四十八年交際つて居る、隨分長い。諸君の居らるゝ高等學院のやうに、昔し大學豫備門と云ふものがありまして、其大學豫備門と云ふ所へ、明治九年と云ふと、諸君から見れば昔し昔しの大昔だが、其時に同時に入學したもので、其時から氣が合つて仲を善くして今日迄同じ早稲田學園の爲めに多少盡して居ると云ふ此三人、此三人が一緒に寄ると、いふことは、會議や何かではありますけれども、三人だけ暢氣に寄

つて遊ぶと云ふやうな機會は尠ない。そこで恰度君が來ると云ふから、市島君を呼んだと云ふので、熱海の双柿舍といふ、坪内君の別莊といふ程のものではありませぬけれども、併し坪内流に趣味のある家で、古い柿の木が二本ある所から、之を双柿舍といふ、其處へ三人が會合して、朝の地震で少し驚いたけれども、晝飯頃には勇氣を回復して、三人でいろ〳〵合作をしたり、氣焔を吐いたり寢轉んだりして遊んだ、其時に坪内君が

しかすかに翁さびけり君も我も

心は昔ながらなれども

といた歌を讀んだ。其中に翁さびけりと云ふことがある。お爺さんになつたといふことである。翁と云ふと體裁が宜いがそれになるのは餘り感心しない、さう云ふ歌を讀んだ。其時に私は歌は能く知らないが、返しを一つ讀んだ。それは歌だかヌタだか分らないが、斯ういふのである。

八十あまり五とせ生きて働きし

ためしを見ても我れ老いめやも

八十五歳の高齢迄生きて働いた人があると思ふと、我は老いたりなどとは言はれない、斯う云ふ怪しい歌を讀んだのであります。是は言ふを俟たずして故大隈侯爵のことだ、八十五迄あの通り生きて働いた人の例がそこにあるのだから、僅か六十五で以て、病氣で困るの、年を取つたのなどと云ふことは甚だ相濟まぬ譯でありますが、併し事實は事實で、此頃元氣が悪いのであるから、餘り有益な御話は出來ぬかも知れないのである、そこは御宥恕を願はなければならぬ。

熱海双柿舍に於ける高田博士
坪内博士及市島名譽理事

二　何故に高等學院が出來たか

そこで第一諸君に御話したいことは、どう云ふ譯で此高等學院と云ふものが出來たか、諸君は此處へ來て學ばれる位であるから、能く御承知であらうが、併し念の爲め諸君に夫れからして御話しなければならぬ。高等學院と云ふものはどうして出來たものであらう、高等學院を早稲田に置いて、而かも一つのみならず二つ迄造つたと云ふ其理由は、詰り早稲田大學が横から見ても縱から見ても、又國民から見ても政府から見ても、眞の大學となつた爲である。官公私立平等、是は私共が過去四十年、一日たりとも其目的を達することに付いて努力しなかつたとはなかつたと言ひ得る教育制度上一大目的の實現である。政府の人は私立では高等學校などは迚も出來るものではないと考へて居た、其前はもつと甚しかつた。專門學校も出來るものでない、中學も出來るものでないと云ふやうに考へて居たのである。段々開けて來た後でも、私立で以て高等學校は出來ない、況んや大學などの出來るものではないと、斯う極

めて、早稲田の如く、慶應の如く、既に其域に達したものあるに之を無視して居た。私共甚だ之を遺憾として理窟も段々述べた、何とか調査會と云ふものへも出て理窟も屢々述べましたが、理窟ばかりでは埒が明かないから、先づ御覽ぜよと云ふので、實例を示したのである。其實例と云ふは諸君の見る所の早稲田大學其物である。始めは政法文商と云ふものだけ造つて見ましたけれども、もつと金の掛る、もつと造るに困難なるものを造つて見せなければ、承知しまいと思つて、更に勇を鼓して理工科と云ふもの迄造つたのである。さア此の如く綜合大學が出來たが、まだ政府の諸君は官公私立を平等に見る眼はないのであるか、是が眼に觸れないのであるか、斯く示した譯である。論より證據と云ふが、議論より實際の證據は強いもので、止むを得ず到頭教育調査會とか何とか云ふ會議が出來て、是には仲々偉さうな人が澤山集まつて、餘り集まり過ぎて大した決議も出來なかつたが、併しながら此事實に對しては一言もなく、官公私立平等と云ふことを認め、又政府の人も夫れを認めざるを得ざるに至つた、それを皆認めざるを得ざるに至つた以上は、卽ち早稲田大學とし

て高等學校程度の高等學院を造らなければならぬと云ふので、第一に此第一高等學院が出來、第二に第二高等學院が出來た。それも同じ樣なものを造つたのではない。同じものでは教育上の實驗にならぬと云ふので、一方は三年制度、一方は二年制度で、今諸君の居られる第一高等學院第二高等學院が出來た。此事を諸君は第一に能く御承知にならなければならぬ。

斯ういふことになると諸君には責任が生ずる。諸君ばかりではない、高等學院の先生方にも責任が生ずる、諸君を導かれる教授講師の方にも重大な責任がある。即ち此平等を事實に於て實現しなければならぬといふ責任がある。今日斯くなつた以上は、外の高等學校よりも早稲田の高等學院は程度が低い、それだから學生の力が弱いと云ふことがあつては言譯がないから、諸君大いに奮はなければならぬ。諸君を導く教授講師諸君又大いに奮はなければならぬと斯う思ふ。

三　高等學院の本領は何處にある

全體高等學院と言ふと何か大學豫備校みたやうなもので詰らぬものゝやうに世間で考へて居る人が少なくないが、中々さうでない、固よりさうでない、亞米利加へ行つて御覽なさい、亞米利加の大學に於ては恰度此高等學院が大學其者の本體である。所謂 Under graduate Course と云ふのが大學の本體である。即ち Post graduate Course と云ふものが所謂大學院式のものである。

大學其者が詰り日本の高等學校のやうなものである。どうしてさういふことがあるかといふと、日本の人は專門學でなければ學問でないやうに思ふが、是は大きに間違つて居る。是は日本が早く人間を役に立てよう、日本は短い間に此所迄發達した國家であるから早く人間を役に立てようと云ふので無暗にあせつた其結果である。それで日本では專門でなければ學問でないやうに思ふ弊が往々にしてある。外の學問は準備教育のやうに見る弊がある、が、是は間違ひで、亞米利加あたりでは大抵は諸君の今受けつゝあるリベラル、エヂュケーションが大學教育の主體になつて居るやうである。高等普通教育を受けさへすれば、夫れで一ぱしの人間で何處を濶歩しても、人に何とも指を

さされない人間だといふ此立場から來て居る。尙ほ其上に專門の學に志す者は固よりいろ〳〵な專門學を學ぶのであるが、本體は高等普通教育、本體はリベラル・エヂュケーション、斯う云ふ立場にある。故に諸君は此學校に居られて、或は自から餘り重んじられらいか知らないが、此高等學院は決して詰らぬ所ではない、見樣に依つては寧ろ是が大學の本體と考へなければならず、又其抱負を以て諸君は學問をして宜しい。決して學問と云ふものは專門學術ばかりのものではない。其外のものは其豫備の爲め計りだなどと考へるのは大間違ひであつて、大いに高い意味で教養に資する教育である。諸君が今學びつゝある所のものは其價値で言ふと、もつと重いものだと斯う思ふ。だから日本でも、此處には教育學の有數の大家、第一高等學院長中島君も居られるが、日本でもさう云ふ考を有つて居る人が澤山ある。高等學校は豫備校ではない。高等普通教育、リベラル・エヂュケーションの場所である。斯う理窟は言ふのであるが、併しながら實際そこが中々むづかしい點になつて居る。けれども此高等學院は豫備教育を施す場所ではない、ヂエントルマン・エヂュケーシ

ヨンの場所である。諸君は斯ういふ事を能く覺悟して居らなければならぬ。早稻田の教育の上から云へば、諸君は此高等學院に居る內に模範國民となる修養をして大學へ這入つてから、其上に專門學術を學ぶのであつて、模範國民といふ教育の徹底、模範國民の造就といふことは何處で一番餘計するのか殆んど其總てを高等學院でしなければならぬ。高等學院の學生たる諸君は其模範國民となる資格を此處で養ふのである。諸君は斯う思つて居らなければならぬと考へる。

四　豫備教育と教養教育

然しながら豫備教育と教養教育と別けていつても課目は大抵同じやうなものである。各課目を較べて見れば大した差別のあるものではない。諸君が此處で學ぶのは上へ行つて專門學術を學ぶ時分の助けになる、外國語とか數學などは殊にさうであるが、併し學ぶ心掛が違ふ。此點になると私の言ふ事は素人で不確實で、中島先生あたりに聞いて見ないと餘り大きな口は所け

ないが、私の理解して居る所では課目と云ふものでは大した差別はない、課目を學ぶ心掛が違ふ。其讀む所の書物を將來上へ行つて學問をする時分に必要だから、其讀書力を養ふ一の器械に過ぎないと思つて讀めば、是は豫備教育である。其讀む書物から考へられる所の知識、其書物から及ぼす所の影響、其上から得る所の趣味、即ち自分が毎日學問をするのに自分の修養を得、知識を得、趣味を養ふと云ふ其心持で書物を讀めば、それが即ちリベラル・エヂュケーションになる、高等普通教育になるのである。毫厘の差、千里の違ひと云ふが同じ書物を攫んで見ても、其書物に對する自分の考へ一つで、大層なそこに差別を生ずる。豫備教育とリベラル・エヂュケーションの差別がそこに生じて來るのではなからうか、だから諸君に於ては日々此處で以て學問をされる時に準備と云ふ心持よりも其物から修養を得、趣味を得、知識を得ると云ふ心持で書物を讀まれるやうにしたい。さうすればそれが自から第一義に於て修養教育第二義に於て準備教育にならうと思ふから、其點を篤と考へて研究をされたら宜からうと思ふ。

五　準備教育の弊

教育と云ふものは教養教育リベラル・エヂュケーション固より大切である、又豫備教育も大切でない譯ではない、併しどちらかと云へば豫備教育と云ふ考へであれば、同じ教育が半分死んでしまふと言つて宜からう。殊に是が受驗教育となると全く死教育である、受驗教育は活教育でなくて死教育である、凡そ世の中に於て何が詰らぬといつて受驗教育程詰らぬものはない。受驗教育を盛んにすると國は衰へる、其例は何も遠い西洋あたりに求めなくても宜しい。直ぐに御隣りの支那を見ても分る、支那はなぜ衰へたか、いろ〳〵原因はあるが、一隻眼を備へて居る支那の諸名士は、先年私が支那を漫遊して議論を闘はした時分から、皆其事に氣が付いて居た。即ち支那には科擧の制度と云ふものがある、試驗で人を採る、人才を登用する、洵に結構なことであるやうだが、試驗で採るから其試驗に合格するやうに自分が學ぶと云ふ一の鑄型の中に教育が嵌つてしまふから、どうしても死教育になつて活教育にはなら

ない。支那に活教育が行はれた時代には孔子も出た、莊子も出た、文に於ては韓柳歐蘇、詩に於ては李白杜甫、實に我々が平生尊崇措かざる所の人が澤山出たが、一度科舉の制度が、盛んになつてしまつてから、支那に偉い人間が出なくなり、遂に張之洞袁世凱をして科舉の制を廢して學堂の制たらしめなければならぬ、學校で教育をする、受驗教育でない教育をしなければいかぬ、それが其時分の言葉で言ふと、變法自强、制度を改めて自から强くする、變法、自强の捷徑であると建白せしむるに至つた。其結果教育改革が行はれたのは私が支那へ行つた當時でありました。其時の勢ひで今進んで居れば支那は中々宜い國になつたのだが、病膏肓に入つて居つて、どうも旨くいかぬ、要するに支那を衰へしめたものは受驗教育受驗學問であるといふことだけは是は間違ひない確な事實である。だから今日學問をするに付いて、其學問に對する心掛、同じ書物を見るに付いても受驗の爲めに見る、準備教育の材料として見ると云ふのと、本其物から教養を受け知識を吸込み而して趣味を養ふと云ふ心持で見るのとは非常に差のあるものであるといふことは諸君がよく御考へにならんことを希望する。

六　高等學院は高等學校と同じからず

以上御話したので、高等學院を設けた所以、高等學院なるものゝ性質所謂リベラル、エヂュケーションの場所でなければならぬと云ふことは分りましたらうが、更に一歩進んで諸君に考へて貰ふことがある。此第一第二の高等學院は高等學校ではなくて高等學院である、之を考へなければならぬ。何が故に高等學校と言はずして之を高等學院と言ふか、其當時は私は大學の當局者でありませぬから直接には關係しませぬが、維持員の一人として其相談に與かつた位なことであるが、是には意味があるのだ。政府で拵へたのは高等學校、此高等學校の通りにやるのならば教育上人の眞似をするだけで何の味もない譯である。高等學校が理想的の教育を施す所であると崇め奉つて差支へないものならば一から十迄其眞似をしても宜からうが、さうでないと云ふ以上は、殊に新に高等學院程度の學校を造つて教育をする以上は、何事か一機軸を出す

といふことがなければならぬ。特色を持つと云ふことがなければならぬ。それが爲には高等學校と名を付けるよりも高等學院が然かるべしと云ふとで、維持員會に於て決定されたと私は確に記憶して居る。此點もよく考へて貰ひたい。諸君は高等學校の生徒ではありませぬ、高等學院の學生であつて、高等學校以外に一機軸を何處に出すか知れないが、兎に角一機軸を出す教育の場所で教育される。又先生方が教へる場合に出さなければならぬし、諸君はそれを教はらなければならぬ、其點をよく考へて見たら宜からう。私は今でも記憶して居る、其當時學校の人が、文部省へ行つて高等學院と名を付けると話した。所が、文部省の當局者も中々分つたことを言つたさうである、それも宜からう、同じ樣なものが幾つも出來るのは面白くない、矢張り色々特色がなければならぬから、高等學院極めて贊成であると言つた、全くさう云ふ意味である。

七　我が高等學院の特色（其一）

然らばどう云ふことが特色であるか、又萬々一今日迄其特色が付かないとした所で、どう云ふ特色を付けるのが宜しいか、持つのが宜しいか、之は直に起る問題である。私は一寸思ひ出す儘に此處に書いて來たものがある。第一諸君の氣分が子供的氣分であると云ふことが一の特色にしたい。子供的氣分の保存と云ふことが學院の特色であつて欲しい。大人などには何時でもなれる、なりたくなくても老人に迄なれる。何時迄も〳〵子供の氣分で居て欲しい。亞米利加人などを御覽なさい、大學を卒業して三十年四十年經つた老人が大學へ來て子供のやうな氣分になつて、オールド・ボーイとなつて學生と共に仲宜く遊ぶ、さうして若返りをすると云ふ話を聞いて居るが、況んや、そこに學ふ者は之れはボーイでなければならぬ、子供氣分を失つて早熟な殊に貧弱な色の青い神經質の人間が出來上ることは高等學院の特色としたくないと思ふ。子供氣分の保存是は大切なことである。それには書物ばかり見て居つては駄目だ、一番宜い氣分はスポーツマンシップの氣分であらう。此氣分を養ふことである。朝から晩まで寢ても起きても書物に獅噛み付いて居るなどは知惠のない骨頂だ。さういふことをやるから本を讀むといふこと

が結局苦痛になる。苦痛になるから卒業すると本を讀まなくなる。大學を卒業した以上、世の中へ出たら丸で其先きは本と緣を切つてしまふ。是が今の日本の大體の狀態である、それで西洋と競爭しようなどとは實に間違ひの甚しきものである。ライフ・ロング・スタデーでなければならぬ、ライフ・ロング、スタデーをやる、趣味を以て書物を讀む、此趣味の保存と云ふことを心掛けなければならぬ。趣味の保存と云ふことでをれば無理をして諸君は書物を讀むに及ばない、イヤ〳〵十時間讀むよりも好んで熱心に一時間讀む方がどの位效果があるか分らないから、決して書物にばかり潰つて居る必要はない。スポーツを御遣りなさい。又身體が弱くてスポーツが困るなら、音樂でも何でも宜しい。樂しみをなさい、さうして愉快に御暮しなさい。さうして時間を限つて熱心に勉强をなさい、子供氣分を失はないやうに、高學院に居る間は勿論のこと、大學を卒業しても子供氣分を失はないやうになさい。是を第一の特色となさいと私は諸君に勸告する。

八　其二

もう一つは此高等學院に於て自治公民立憲國民たる素養を養はなければならぬ。諸君は個人と云ふ關係のみの人ではない、ファミリーの一員たる事は勿論だが、同時に國家の國民、世界の市民である。是れだけは常に六尺の體軀にちやんと付いて居る資格である。インディヴィジュアル卽ち個人、家族の一員、國家の一國民、世界の一市民、唯だけの資格は誰も離れられないものである。所で過日中央校庭で私が申しました通り、早稲田學園の主義は皇室中心主義である。唯命是れ從つて服從的消極的の忠君愛國ではいけない、進んで我君を堯舜若くは堯舜以上に爲し奉らなければならぬと云ふ積極的活動的翼贊的の忠君愛國である。聰明なる君主の政を翼贊し奉つて彌善きが上にも善くすると云ふ此忠君愛國的熱心を滿腹に蓄へた人間でなければならぬ。其意味の忠君愛國でなければならぬと、過日私が申したのは諸君の記憶に尙ほ新たでありませう。その爲には諸君は此學校に居る內に自治公民立憲國

民たる修養を今から積まなければならぬ。諸君は世界の一市民としても大に盡さなければならぬが、先づ差向き自治公民立憲國民たる資格を養はなければならぬ。之は專門などで逸ふものではない。俺は機械の方をやるのだから公民でなくても宜からう、そんな馬鹿なことはない、これはどの科にも通じて居ることである。それを教授講師諸君はよく御教へを戴きたし、其教養を學生に與へて戴きたい、是は早稲田大學の最も大切に考へる一の大主義である。

九　其三

憲政始まつて玆に稍や半世紀に近くなるが、今日の世の中の有樣は何事である。此見るもいや、聽くも厭ふやうな猿芝居の如きことが世の中に往々にして行はれて居るといふのは諸君の先輩に立憲國民世界市民たる教養が薄い爲めである。明治の教育は其方針を誤まつた、唯服從的の忠君愛國を說き聽かせて、進んで積極的翼贊的に君と國に盡すと云ふ精神を明治教育が怠つ

た。殊更に怠つた傾がある。其爲めで今日猿芝居の樣なものが全國には行れて居るのであるといふことを知らなければならぬ。此有樣で進むと國家は衰へる、卽ち吾輩が諸君に期待することは此趨向を轉回することである。而して消極的服從的忠君愛國を積極的翼贊的の忠君愛國となす事である。其修養が自治公民立憲國民たる修養であるから之を怠つてはならぬ。これも合せて高等學院の一特色一機軸としなければならぬと思ふ。

一〇　其四

それからもう一つは、是は學問の仕方に付いて又諸君の教養の方針としてである。私は常に此言を繰返すが、學問はどうしても自修的でなければならぬ、受身の學問は役に立たぬ。教師の講釋を聽いて書物に假名を付けて歸る學問は諸君が何時迄やつて居ても何にもならない。自分で字引を引いて首を捻つて考へて讀んで果して自分の讀方が正しいか正しくないか先生方に問合せると云ふ、こちらから進んで行く自修的學問でなければ、何年諸君が學

問をしても其學問は何にも役に立たない。學問はどうしても自修的でなければならないのである、自修的でなければ學んだものが消化しない、肉體の食物……是も屢〻言ふことであるが……精神的食物も同樣である。食ふと云ふことが目的ではない。食つた物が消化されて、血となり、肉となり、骨となつて此身體が出來上る身體が丈夫になると云ふことが必要である。精神上の食物だつてさうで、唯詰込むが宜いのではない、頭の中へ入れたものが消化されて血となり、肉となり、骨となつて知らず識らずの間に諸君の榮養になる知識的榮養になると云ふことでなければ學問をしても何にもならぬ、それはどう云ふ方法で其目的が達せられるか、他なし、自修と云ふことの二字を實行する事である。此自修と云ふことを忘れては、諸君が二年間高等學院に居ても、三年間高等學院に居ても何の役にも立たない。中學一年から英語の稽古をして大學を卒業しても實は英文が本當に讀めない、日本の書物で讀んで英書の讀めるやうな顏をする位な人間にしかなれない。そんなことで一體學校へ入るだけの效果があるか、斯う言ひたくなるのでありますから、此自修と

云ふことは決して忘れないやうにしたい。

一一 其五

それは學問のことだが、學問ばかりではない、言を俟たずして人間と云ふものは品性を重んじなければならぬ。此品性を重んずるにはどういふことをモットーとして宜しいかと云へば自敬である、自から敬ふ。此身體は苟くも天地の間に生れたものでない、苟且にも生れたものではない。尤も其天分に依つてミッションに大小はあるか知れないが、兎に角生れた以上は盡す可き天職を持つて居るのだ、ミッションがあるのだ。其ミッションを完うすべき我であるから、我自ら我を輕んじては相成らぬ、身體髮膚之を父母に受く、敢て毀傷せざるは孝の始なりと孝經にあるが、それは肉體的の事で、蚤にも食はせないと云ふのであらうが、肉體的の意味ばかりではない、精神的にもさうである。自分の身體を自分で重んずる、何が故に重んずるか、果すべき使命があるから重んずる、是が自敬と言ふことである。慶應義塾の福澤翁が自尊と言つ

たのも詰り同じでせうが、自尊と云ふ言葉は少し藥が強過ぎる感がある。何となれば御釋迦樣は天上天下唯我獨尊と言はれた。是は御釋迦樣だから宜いが、御釋迦樣ならざる者が下手にこんな事を考へると間違ひが起る。叨りに自から尊大にする、一體此尊大と云ふ字が面白くない。漫りに自から尊大にする。其意味の自尊ではいけない。福澤翁は其意味で使つたのではあるまいがどうも間違ひが起り易い、むしろ穩當に自敬といふ文字をモットーとしたら宜からう。自修自敬、之を高等學院の諸君の心掛とし之を特色としたいと思ふ。

之を要するに今申述べた事は一寸私の思付きに過ぎない。此席には教育專門家たる第一院長の中島先生も居られる、又教育界實地界に長い經驗を積まれた我尊敬すべき第二院長杉山先生も居られる。其方々其他の教職員の方々にも夫々御考へがあるであらう、私は大體に於て諸君に對して責任者であるけれども、此兩方の學校は右申す兩院長教頭主事其他の諸君に御任せして居るので、私が敢て駄辯を費す必要はないやうである。ただ私は高等學校

ではなく高等學院である、高等學院である以上は是に對して特色を持たせなければならず、諸君も又自から持たれなければならぬと云ふことだけを申すのが目的である。今申したのはホンの考案に過ぎないので、斯うしろあゝしろと云ふ私の註文ではないと云ふことを御承知を願ひたい。

一二　早稲田大學の教旨

早稲田大學の教旨として玆に掲げたるものゝ終りを見ますと

早稲田大學は模範國民の造就を本旨と爲すを以て、立憲帝國の忠良なる臣民として個性を尊重し、身家を發達し、國家社會を利濟し、併せて廣く世界に活動す可き人格を養成せん事を期す

即ち第一には個人である。之が人の世話になるやうでは仕方がない、個人の獨立即立身がもとである。個人主義と云ふと何か利己主義と間違へて危險がる人もあるが、それは大いなる間違ひである。個人主義と云ふは自分の獨立である、而して此一個人を此間死んだウッドロー・ウヰルソン君が言つたや

うに國家と一致させる、アイデンティファイさせる、國家則個人、個人則國家、是が諸君の考へでなければならぬ、個人が衰へて國家が盛んになる筈はない。併し個人を尊重するは最も大切であるが更に進んで國家社會を利濟する、併せて廣く世界に活動し貢獻する、詰り個人主義と國家主義、國家主義と世界主義、其間に衝突などのあるものではない。身の爲になる事は國の爲になる、國の爲めになる事は世界の爲めになる。世界が平和でなければ一國が安寧でない。一國が安寧でなければ一家一身が安樂が出來ぬ。其利害は衝突せずに行くのである。夫と同時に世の中に生れたならば先づ自分の身を立てる、立身を第一として更に進んで社會國家に盡す、更に進んで世界の爲めに盡す位の考へがない位ならば學問なぞはしない方が宜い。此三段關係は自分各自の身體に付いて居る、之はどうしても遁れないものである、其間に立つて自分の天分に應じた使命を完うすると云ふことに結局なるのである。其爲めに諸君は今學びつゝあるのであるが、其學ぶことが大學に行く手段などと云ふ低い考へで學ばないで、其學ぶ所のものから直接に知識を得、直接に修養を得、直接

に又趣味を養ふと云ふことになるといふ、此廣いゆるやかな考へで何時迄も子供たることを忘れずに、成る可く子供氣分を保存して勉强して行かれたならば我高等學院は蓋し全國にある他の高等學校を遙に凌駕して其教育の效果が光明を放つに至るであらう。其御蔭で早稻田大學其者も總ての場合官私立平等の地位に立つばかりでなく他の帝國大學慶應大學等の總てよりして一頭地を抽んでた大々學と認められる樣になるだらうと云ふことを、私は固く信じて疑はざる次第であります。（大正十三年二月八日第一高等學院に於て）

早稲田大學教職員

總長

高田早苗

理事

高田早苗
田中穂積
伯爵松平頼壽
淺野應輔
鹽澤昌貞
平沼淑郎

監事

坂本三郎
宮田脩

維持員

侯爵大隈信常
市島謙吉
早速整爾
渡邊亨
金子馬治
高田早苗
田中穂積
坪内雄藏
中島半次郎
上原鹿造
浦邊襄夫
山田英太郎
伯爵松平頼壽

增田義一
松山忠二郎
昆田文次郎
寺尾元彦
淺野應輔
三枝守富
坂本三郎
宮田脩

子爵

澁澤榮一
鹽澤昌貞
平沼淑郎
砂川雄峻

基金管理委員

子爵

澁澤榮一
原富太郎
大橋新太郎
内藤久寛
村井吉兵衛
安田善三郎

男爵

森村開作

名譽教職員

名譽總長 大隈信常
名譽教授 坪内雄藏
名譽理事 市島謙吉

理工學部商議員

高松豐吉
竹内明太郎

學部長

政治經濟學部長 鹽澤昌貞
法學部長 寺尾元彦
文學部長 片上伸
商學部長 平沼淑郎

理工學部長　山本忠興

專門部長

部長　坂本三郎

教務學科主任

文學部哲學科主任　關與三郎
同　文學科主任　吉江喬松
同　史學科主任　西村眞次
商學部教務主任　出井盛之
理工學部機械工學科主任　沖巖
同電氣工學科主任　山本忠興
同採鑛冶金學科主任　德永重康
同　建築學科主任　內藤多仲
同應用化學科主任　小林久平
專門部政治經濟科主任　五來欣造
專門部法律科主任　遊佐慶夫
專門部商科主任　出井盛之

高等師範部教務主任　永井一孝
專門學校教務主任　高井忠夫

圖書館長

林癸未夫

圖書館顧問

市島謙吉
坪內雄藏
浮田和民

圖書館商議員

大山郁夫
安部磯雄
阿部賢一
北澤新次郎
二木保幾
寺尾元彥
遊佐慶夫

金子馬治
吉江喬松
永井一孝
桂五十郎
山本忠興
沖巖

第一高等學院長及教頭

院長　中島半次郎
教頭　野々村戒三

第二高等學院長及教頭

院長　杉山重義
教頭　定金右源二

早稲田專門學校長　坂本三郎
工手學校長　德永重康

幹事

難波理一郎

主事、副主事

教務課主事　中村芳雄
庶務課主事　蠣崎敏雄
同　副主事　大久保清志
會計課主事　難波理一郎
同　副主事　溝口直枝
學生課主事　望月嘉三郎
記念事業部主事　片山利久
同　副主事　上村鐵雄
政治經濟學部　副主事　七五三野仁一郎
法學部　副主事　佐藤隆治
文學部　副主事　岸畑久吉
商學部　副主事　丹尾磯之助
理工學部　主事　木村三郎
專門部　主事　大島正一
專門學校　副主事　坂本隆昌
高等師範部　副主事心得　津田龜之助

第一高等學院主事　原田實
第二高等學院副主事　南晴耕
早稲田工手學校主事　土屋詮教
圖書館主事　小林堅三
大隈會館主事　深澤政介
臨時建築事務所技師　桐山均一
記錄編纂部囑託　前田多藏
編輯及講演部長　內ケ崎作三郎
校外教育部長　青柳篤恒

事務顧問
前田多藏

學校醫
甸田實
岡崎正見
藤田莊太郎
上石留五郎

教授講師

政治經濟學部及政治經濟科

教授
服部文四郎　林癸未夫　二階堂保則
二木保幾　本多淺治郎　大山郁夫

法學博士　高橋清吾　法學博士　田中穗積　法學博士　副島義一
法學博士　中村進午　法學博士　內ケ崎作三郎　法學博士　浮田和民
法學博士　梅若誠太郎　法學博士　牧野菊之助　煙山專太郎
文學博士　五來欣造　文學博士　遠藤隆吉　安部磯雄
法學博士　阿部賢一　法學博士　青柳篤恒　法學博士　鹽澤昌貞
法學博士　志賀重昂

助教授
中野登美雄

講師
農學博士　西垣恒矩　經濟學博士　太田正孝　法學博士　岡田朝太郎
渡俊治　嘉山幹一　神尾錠吉
村瀨直養　宇都宮鼎　久松廉吾
法學博士　柳川勝二　法學博士　粟津清亮　信夫淳平
島田孝一　島村他三郎

教授

法學部及法律科

法學博士 副島義一　法學博士 中村進午　中村萬吉
法學博士 柳川勝二　寺尾元彦　遊佐慶夫
法學博士 鹽澤昌貞　法學博士 鈴木喜三郎　杉田金之助

助教授

高井忠夫　中村宗雄

講師

井上孚麿　井上周三　今村恭太郎
岩本勇次郎　出井盛之　大濱信泉
大原昇　尾高武治　鬼澤藏之助
法學博士 岡田朝太郎　神谷健夫　中村仲
中村彌三次　村瀨直養　草野豹一郎
ヘルマン・フロイドル・スペルゲル　法學博士 二上兵治　藤井新一
文學博士 遠藤隆吉　阿部賢一　阿部文二郎
喜多壯一郎　島田鐵吉　島村他三郎
清水孝藏　椎津盛一

文學部

教授

五十嵐力　西村眞次　片上伸
勝俣銓吉郎 文學博士　金子馬治　横山有策
吉江喬松　高杉瀧藏　武田豐四郎
伊達保美 文學博士　津田左右吉　中島半次郎
法學博士 浮田和民　文學博士 山岸光宣　牧野謙次郎
增田藤之助　煙山專太郎 文學博士　藤田豐八
文學博士 遠藤隆吉　紀淑雄　岸本能武太
日高只一　關與三郎　杉森孝次郎

講師

伊藤輔利 文學博士　市村瓚次郎　馬場哲哉
レイモンド・パントック　二階堂保則　帆足理一郎
文學博士 大森金五郎　大山郁夫 文學博士　大瀨甚太郎
アレクサンドル・ソノーフスキー
小田内通敏　渡利彌生
川合孝太郎　河面仙四郎　吉田源次郎
吉田豐吉　谷崎精二　田中喜一

馬田行啓　野々村戒三　窪田通治
黒木勘藏　文學博士　桑木嚴翼　熊崎武良溫
山口剛　八杉貞利　ケンナデイー・マグニッキー
松田治一郎　增田惟茂　舟木重信
藤本民雄　ヘルマン・フロイドル・スペルゲル　五來欣造
江間道助　赤松保羅　安藤正次
青柳篤恒　定金右源二　坂崎坦
メタクサ伯爵夫人　清水泰次　文學博士　椎尾辨匡
椎名其二　法學博士　鹽澤昌貞　繁野政瑠
信夫淳平　島村民藏　トレバー・ウローンズ
樋口國登　平林初之輔

商學部及商科

教授

伊地知純正　出井盛之　服部文四郎
勝俣銓吉郎　神尾錠吉　法學博士　田中穗積
高杉瀧藏　武信由太郎　中田浩
柳川勝二　法學博士　牧野菊之助　小林行昌

小林新　北澤新次郎　遊佐慶夫
島田孝一　樋口清策　法學博士　平沼淑郎
杉山重義

助教授

長谷川安兵衛　末高信

講師

岩本勇次郎　原島茂　二木保幾
大東直太郎　太田哲三　大久保常正
岡田誠一　嘉山幹一　立川長宏
法學博士　中村進午　柳樂健治　長野惠太
宇都宮鼎　前田定之介　ミセス・ケート
古楠顯理　寺尾元彦　阿部賢一
青柳篤恒　法學博士　粟津清亮　坂口武之助
杉山令吉

教授

理工學部

理學博士 德永重康
工學博士 岡田信一郎
工學博士 吉田享二
工學博士 內藤多仲
野村堅
松本容吉
小室靜夫
工學博士 佐藤功一
工學博士 密田良太郎

助教授

伊原貞敏
德永庸
川原田政太郎
都築謙雄
野村松三
山本研一

富井六造
工學博士 沖巖
民野雄平
氏家謙曹
山內弘
松井元太郎
今和二郎
吉川岩喜
工學博士 澁澤元治

今井象次
大澤一郎
武富昇
村田榮太郎
黑川象三郎
山內眞三雄

富田逸二郎
渡部寅次郎
堤秀夫
上田大助
工學博士 山本忠興
工學博士 小林久平
工學博士 淺野應輔
北澤武男

帆足竹治
大隅菊次郎
坪內信
村越安吉
山口榮一
藤井鹿三郎

新井忠吉
鹽澤正一

講師

工學博士 伊東忠太
林癸未夫
戶野琢磨
小川芳太郎
越智誠二
笠原敏郎
吉田謹平
武石弘三郎
長屋修吉
松繩信太
河面仙四郎
江藤玄三
子爵 秋田重季

木村幸一郎
師岡秀麿

井上誠一
西松唯一
張忠一
小穴秀一
和田清
鎌田彌壽治
高津清
竹內六藏
山下潤藏
松尾靈彥
後藤曠二
青木芳彥
木部一枝

三宅當時
鈴木德藏

市川繁彌
富永齊
岡田要之助
小栗捨藏
勝田一
川口宇太郎
竹下清松
永井彰一郎
山內不二雄
牧銳夫
小林明
青山秀三郎
水野範之助

青柳篤恒
繁野政瑠
日高只一

第一高等學院

教授

飯田敏雄
石井眞峯
長谷川慶三郎
本間誠
岡次郎
影山千萬樹
谷崎精二
田幸彦太郎
中島半次郎
梅若誠太郎
窪田通治
安藤正次
清水泰次
齋藤坦藏
トレバー・ウヨーンズ
伊藤康安
池田清
原田實
富田逸二郎
川合孝太郎
吉川秀雄
高谷實太郎
民野雄平
內ケ崎作三郎
氏家謙曹
久松廉吾
岩本堅一
泰孝道
西村眞次
岡村千曳
勝俣銓吉郎
吉田源次郎
高見豐
中桐確太郎
上井磯吉
野々村戒三
山口剛

志水直彦
森田哲次

高等師範部

教授

桂五十郎
松平康國
岸本能武太
肥田丈夫
森口多里
永井一孝
牧野謙次郎
宮井安吉
廣瀨誠一
中桐確太郎
增田藤之助

講師

五十嵐力
西村眞次
文學博士 尾上八郎
文學博士 金子馬治
高杉瀧藏
竹野長次
熊本謙二郎
牧一
石原庄平
保科孝一
渡邊藤吉
上井磯吉
田中喜一
中島半次郎
矢口達
深澤由次郎
西弍
本多淺治郎
勝俣銓吉郎
横山有策
伊達保美
法學博士 中村進午
山口剛
古楠顯理

山崎貞
松永材
增田綱
藤野了祐
會津常治
佐藤仁之助
喜多壯一郎
推名其二
日高只一

講師

馬場哲哉
萩本文海
帆足理一郎
アレクサンドル・ワノーフスキー
吉田彌六
ウッドマン
矢口達
松島鉦四郎
深澤由次郎
小林明
青柳篤恒
定金右源二
光井武八郎
繁野政瑠
樋口清策
原久一郎
西弐
渡俊治
河野通禰太
高橋善吉
浦上五三郎
前橋孝義
牧野鑑造
福井久藏
近藤潤次郎
赤松保羅
佐久間原
宮島新三郎
清水泰次
鈴木貫一郎
早川文哉
二木保幾
渡利彌生
梶島二郎
根本靜吉
ゲンナディー・マゲニツキー

前原重秋
ヘルマン・フロイドル・スペルゲル
小林龍雄
雨宮育作
崎田喜太郎
弓場重泰
末高信

第二高等學院

教授

石井眞峯
本多淺治郎
大久保常正
川合孝太郎
高谷實太郎
中村仲
熊崎武良溫
松島友治
藤本民雄
小柳篤二
佐竹直重
ギッブス
メタクサ伯爵夫人
西村眞次
本間誠
渡俊治
吉田源次郎
中城陟
上井磯吉
窪田通治
アイ・セー・フィッシャー
藤本勝實
江間道助
笹原助
岸畑久吉
望月信成
二木保幾
岡村千曳
影山千萬樹
吉川秀雄
中桐確太郎
久松廉吾
山口剛

矢口達
前橋孝義
古楠顯理
會津常治
佐藤仁之助
島村民藏
杉山重義

講師

イー・エス・ケート
馬場哲哉
吉田豐吉
中村萬吉
山口一誠
江間道助
弓場重泰

山崎貞　文學博士
增田綱
小林龍雄
赤松保羅
定金右源二
繁野政瑠
鈴木貫一郎

池田清
大濱信泉
竹野長次
馬場正利
ケナンデイー・マグニツキー
アレクサンドル・アワノーフスキー
メタクサ伯爵夫人

山岸光宣
藤本民雄
近藤潤次郎
青柳篤恒
宮島新三郎
日高只一

原久一郎
河面仙四郎
土橋仁之進
浦上五三郎
ヘルマン・フロイドル・スペルゲル
喜多壯一郎
南晴耕

椎名其二

工手學校

講師

伊藤直和
石井定
井上邦治
市川繁彌
堀江貞治郎
德永庸
大隅菊次郎
沖巖　工學博士
岡崎直樹
大橋精一
渡邊虎一
門倉則之
河合清

岩崎富久
岩野城生
井上一之
萩本文海
星野富太郎
鳥山邦彥
緒方一三
大久保常正
尾崎久助
大澤源之助
渡邊量夫
片岡孟夫
吉田享二

伊原貞敏
今井兼次
今川鎭夫
埴野一郎
德永重康　理學博士
外川松雄
織田隆
岡村千曳
大澤一郎
渡部寅次郎
和田善次
金子從次
吉原重威

吉原四郎
武田修三郎
高澤雅雄
高林末治郎
谷田清丸
都築謙雄
奈良久助
上井磯吉
氏家謙曹
上浪朗
野村松三
楠本幹夫
山内弘
前川幸一郎
藤井鹿三郎
藤田信達

吉武巖
立川長宏
高橋勇
竹田虎雄
坪内信
内藤多仲
村田榮太郎
村野爲次
氏家隆武
梅津七藏
桑田福太郎
山本忠興
眞隅隆介
眞船英之助
藤井隣次
今和三郎

工學博士

法學博士

田中穗積
民野雄平
竹林礎次郎
田井善道
土屋詮敎
中島啓藏
村越安吉
上原靜夫
上田大助
野村堅
久松廉吾
山本外三郎
牧野鑑造
益子充
藤本慶祐
後藤量介

小泉素彦
有元岩鶴
阿部新作

工學博士

佐藤功一
甘蔗生規矩
木村榮二郎
菊地惟中
三井道男

法學博士

鹽澤昌貞
清水元三郎
廣田友義
平井喜久松
森田哲二
杉山謙治

小室靜夫

子爵

淺井郁太郎
足利於菟丸
佐藤茂助
岸畑久吉
木村幸一郎
菊地英彦
宮部宏
篠原喬亮
下村孝一
日高藤麿
廣谷宣布
關謹爾

秋田重季

子爵

荒井惟俊
新井忠吉
定金右源二
木村三郎
北澤武男
三宅當時
水船克之
志水直彦
鹽澤正一
平野侃介
師岡秀麿
鈴木德藏

評議員

會長伯爵 松平頼壽

井上辰九郎　井上廣居
五十嵐力　池田龍一
石黒大次郎　石澤愛三
早速整爾　早瀨太郎三郎
西尾謙吉　西本竹吉
殿界榮吉　伴野賢造
小野駿一　小山溫
沖巖　若林成昭
渡邊惣衛門　嘉納虎太郎
片上伸　金子馬治
影近清毅　上遠野富之助
田中穂積　田中小太郎
高山惠三　高根義人
副島義一　坪谷善四郎
内藤多仲　中川末吉
中村進午　中村萬吉

井上要
石原善三郎
原嘉道
橋本良藏
星野治作
小川爲次郎
大橋誠一
渡邊亨
川井正進
金澤種次郎
横山有策
谷村一太郎
高杉瀧藏
辻村良衛
中津海知幾

中村房次郎　中野禮四郎
永井一孝　並河正
内ヶ崎作三郎　浦邊襄夫
野間五造　栗山賚四郎
山田甫　山澤俊夫
山本愼平　前橋孝義
町田忠治　松田謹一郎
松村謙三　松山忠二郎
牧野謙次郎　增田義一
藤井健治郎　降旗元太郎
小林行昌　小林久平
小山松壽　五來欣造
寺尾元彦　有田溫三
安部磯雄　佐藤正
齋藤庫四郎　坂本三郎
北澤新次郎　遊佐慶夫

中村祐吉
中島半次郎
上原鹿造
浮田和民
山田英太郎
山本忠興

男爵 前島彌

松平康國
松澤知司
增子喜一郎
福島武之助
小竹文治郎
昆田文次郎
淺野應輔
齋藤和太郎
崎山刀太郎

三宅雄二郎　水野正己　南方常楠
宮田脩　宮澤實周　鹽澤昌貞
篠原彌吉　柴田秀藏　平沼淑郎
平田讓衛　廣井一　久富久吉
森盛一郎　本野博章　森田卓爾
關和知　砂川雄峻　杉田駿
杉山重義　杉坂源清　鈴木茂雄

財團法人 早稲田大學校規

（寄附行爲書）

第一章　總則

第一條　本財團法人ハ早稲田大學ト稱ス

第二條　本大學ハ品性ノ陶冶、學術ノ教授、研究及普及ヲ目的トス

第三條　本大學ハ事務所ヲ東京府豐多摩郡戸塚町大字下戸塚六百四拾七番地ニ設置ス

第二章　資産

第四條　本大學ノ資産ハ別冊財産目錄ニ掲載ス

第五條　本大學資産ノ管理、使用及處分ハ維持員會ノ決議ニ依リ理事之ヲ行フ

第三章　名譽總長

第六條　本大學ハ設立者侯爵大隈重信ノ家督相續人ヲ名譽總長ニ推薦ス

第四章　維持員及維持員會

第七條　本大學ニ維持員貳拾五名ヲ置ク

第八條　維持員ハ左ノ貳種トス

一、維持員會ニ於テ功勞者中ヨリ推擧シタル者　拾壹名

二、評議員會ニ於テ評議員中ヨリ選出シタル者　拾四名

第九條　維推員會ハ維持員ヲ以テ組織シ本大學ニ關スル重要事項ヲ議定ス

第十條　維持員ノ任期ハ參年トス

第十一條　維持員ノ資格ハ左記ノ事由ニ依リテ消滅ス

一、任期滿了

二、辭任

三、禁治産、準禁治産、破産